

国立国語研究所学術情報リポジトリ

フーバー・タテイシコレクション（ハワイ日本文化センター所蔵）資料集

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松平, けあき, 宮崎, 早季 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000254

人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究
日本関連在外書料調査研究
ハワイにおける日系社会資料に関する
資料調査と社会調査の融合的研究

フーバー・タテイシコレクション
(ハワイ日本文化センター所蔵)

資料集

朝日祥之 (編)
松平けあき・宮崎早季 (著)

2024 (令和6) 年 3月

は　じ　め　に

朝日祥之

1. 本プロジェクトの目的

本プロジェクトは、第2期中期目標・中期計画、ならびに第3期中期目標中期計画で推進された「日本関連在外資料の調査研究」を発展的に継承するものである。本プロジェクトで扱う近現代史資料、とりわけ20世紀の資料は、その数が膨大である上、個人や地域・民間で所蔵されている場合は、その管理・運用体制が構築されていないものも多い。しかも日本語で書かれた在外移民資料の場合、世代交代をくり返すたびに日本語を理解できる者が減少する課題もある。本プロジェクトにおいては、第3期プロジェクトにおいて整備をはじめた音声資料目録データベースをさらに充実させること、所蔵資料の概要、資料管理の現状と将来の見通し、資料を所蔵することになった経緯や地域社会・関係者との関わりに関する社会調査を行う。これにより、ハワイにおける民間レベルの「歴史実践」を把握しつつ、資料の概要を把握するための目録を作成する。

2. 本報告書について

本報告書は、本プロジェクトのうち、ハワイ日本文化センター資料室（Japanese Cultural Center of Hawai‘i Resource Center）に所蔵されているフーバー・タテイシコレクションの概要（シノプシス）を資料集としてまとめたものである。

Hoover Tateishi Collection シノプシス概要

このコレクションは、ハワイ日本文化センター（Japanese Cultural Center of Hawai‘i）所蔵の録音資料群である。録音には、ラジオ番組や講演会の録音などが含まれる。ほとんどが日本語のものであるが、中には英語のものも含まれている。

シノプシスはオープンリールテープ1本につき1件作成した。一本のオープンリールテープが、複数のデジタルファイルに分割されているものもある。また、一本のオープンリールテープに複数のラジオ番組や講演、番組用のインタビューが録音されている場合もある。

シノプシスには録音資料の情報を以下の項目について記し作成した。

1. タイトル：各資料のタイトルは、それぞれのデジタルファイルの元資料であるオープンリールテープの箱書きなどを参考にする。タイトルの頭に三桁の英数字の所属機関番号を含む。
2. ファイル名：録音デジタルファイルの名称を記している。デジタルファイルが複数ある場合は、読点を用いて併記する。
3. ホストスピーカー：箱書き、もしくは録音資料中で聞き取れた名前を記入する。
4. ゲストスピーカー：箱書き、もしくは録音資料中で聞き取れた名前を記入する。
5. 言語
6. 放送日：箱書きに従って、もしくは録音資料中で聞き取れた日付を記入する。箱書きに日の付は「放送日」と明らかにされていないこともあり、録音日の可能性があることも触れておく。
7. 開始・終了：録音デジタルファイルの開始時間・終了時間を記入する。録音デジタルファイルが2件ある場合は、それぞれの開始時間・終了時間を記入する。
8. 内容：録音デジタルファイルで聞き取れた内容を簡潔に記入する。できるだけ話者の使用した単語を忠実に抽出することとする。シノプシス作成者によって補足される内容は（）内に収める。補足事項が長くなる場合は、脚注に記入する。複数の番組、講演会、インタビューなどの録音が含まれる場合は、【】に開始時間と終了時間を記入し、それぞれのタイトルが箱書きなどから分かる場合はそれを記入する。分からぬ場合は、録音資料中で聞き取れた内容から適宜タイトルをつける。録音デジタルファイルが2件ある場合は、【】の前にファイル名を記入する。

001 Daniel K. Inouye

【ファイル名】HTC_001_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】Daniel Inouye など

【言語】英語

【放送日】1968年8月27日

【開始】00:00:20

【終了】00:54:39

【00:00:20～00:30:43】ダニエル・イノウエの演説中継。

アナウンサーによるイノウエの経歴紹介から始まる。イノウエは当時43歳で弁護士、ハワイ州選出の民主党の上院議員である。

次に、会場の司会者によるイノウエの紹介がある。イノウエは第二次大戦の英雄で、1959年ハワイ立州後初の下院議員である。彼は民主党全国大会(National Political Convention)において、基調講演を行なった。

ベトナム戦争とその反対運動についてイノウエが語る。道徳に反するベトナム戦争は早急に政治的交渉によって終結すべきであるという。黒人についても次のように語る。イノウエは日本を出自に持つアメリカ人として、「どうして黒人はあなたのように成功できないのか」と聞かれることがよくあるそうだ。まず日系人と黒人では肌の色が違う。日本人の父は自由市民として権利を保証されていた。(アメリカ本土の日系人とは異なり)大戦中収容されることもなかった。一方で黒人の死亡率は不当に高く、給料が低い。ベトナム(戦争)での黒人兵士の犠牲も多い。民主党のもとで暴力や人種主義を否定し人々の経済的、社会的地位が改善されてきた。法と秩序に敬意を払い、市民権を守らなければいけないとイノウエは語る。核の廃絶に向けた合意が平和の基盤になっているとも指摘した。1963年、アメリカ連邦政府は教育関連の予算を増やした。過去4年だけ見ても過去100年の2倍の予算を使っており、人権など人間の達成すべき目標の基礎となっている。黒人の才能は白人の才能と同じくらい重要である。私たちは今まで頑張ってきたことを、もっとやることができるといノウエは語る。私たちは変化と挑戦を信条とする党であると民主党について語った。ハワイのアロハはハローという意味だけでなく、アイラブユーという意味も持っている。すべてのアメリカの仲間たちに、アロハ、とスピーチを締め括った。

【00:30:46～00:54:59】ユニバーシティ・レポート：ハワイ大学システムによる放送。

いじめに対する教師の役割について説明される。ゲストはクリス・ササキ。カピオラニ・コミュニティ・カレッジについての説明と、ハワイ大学卒業見込み学生に向けたキャリア案

内も行われた。

002 ワシントンの時間

【ファイル名】HTC_002_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】N/A

【言語】日本語

【放送日】1973年8月1日

【開始】00:00:27

【終了】00:54:39

【00:00:12～00:00:22】音声テスト

【00:00:28～00:10:16】本編

ウォーターゲート事件による、翌年の選挙の予想をしている。アーリックマン（John Ehrlichman）の証言についての解説。

この番組の提供は、以下の通り

- ・レストラン・キヨウヤ（ワイキキ・カラカウア通り）
- ・平和堂時計店（アワムラ・トクヨシ）
- ・Jambo's Driving（フランシス・スガイ、ギブソンディスカウントセンター横）

003 多田道太郎

【ファイル名】 HTC_003_wav01、HTC_003_wav02

【ホストスピーカー】 不明

【ゲストスピーカー】 多田道太郎、President Gerald Ford

【言語】 日本語、英語

【放送日】 不明

HTC_003_wav01 【開始】 00:01:04 【終了】 01:05:34

HTC_003_wav02 【開始】 00:00:16 【終了】 01:00:01

HTC_003_wav01 【00:01:04～01:05:34】 多田道太郎、放送日不明

出演は京都大学のヨーロッパ思想を専門とする多田道太郎。多田はハワイ大学イーストウェストセンターのカトウ・ヒデトシがコーディネートする大衆文化の比較セミナー参加のためにハワイに訪問中である。放送テーマは身近な日本文化である。特に日本人のしぐさ、家や町のつくりなどに日本の文化がいかに現れているかについて話された。

日本人は英語で自己表現ができないと多田は語る。言語の問題だけでなく、自分を強く押し出すことにためらいがあるのだという。東南アジアでは、日本の観光客の評判が悪い。集団になっていることが怖く見えるという。

日本が植民地支配を受けなかったことは幸いであると多田は考える。知識やテクノロジーが人を通さずに、モノとして情報として入ってきた。日本人には中心（コア）という考え方がない。日本文化とは周辺的なもの、皮膚感覚的なものであり、美にかかわる。日本の近代化は西洋化と関わると考える人が多いが、そうではないと思う。Westernization のない Modernization があり得ると多田は主張する。その例として日本の近代化がある。江戸が人口 100 万に達したのは、1830 年ごろロンドンとパリで人口が 100 万に達したのと同時期であった。また、大消費人口を集めた政策が近代化に影響を与えた。さらに、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』はヨーロッパで流行していた本よりも多くの部数が発行された。越後屋のような業種ができたのはヨーロッパとほぼ同じが少し早い時期であった。傘や袋が宣伝媒体となっていた。実物模型（レストランのカレーがディスプレイされている）は日本特有のものである。

（豊臣）秀吉の時代にナショナルインテグリティ（国民統合）が起こったと多田は言う。日本人は間（ま）を大切にする。日本の大学では学生が馬蹄形に席を取る。先生の話は聞きたいけれど、距離を取らなければ心理的に安定できない。照れる、冷やかすというのが日本で重要な文化である。親同士のコミュニケーションを子どもが取り持つなど、間の関係が重要である。微妙さが日本文化の核である。

HTC_003_wav02 【00:01:04～01:05:34】 President Gerald Ford、1975/4/21 ?

004 President Ford と同じ。

004 President Ford

【ファイル名】HTC_004_wav01

【ホストスピーカー】 Walter Cronkite, Eric Sevareid, Bob Schieffer

【ゲストスピーカー】 President Gerald Ford

【言語】 英語

【放送日】 1975 年 4 月 21 日

【開始】 00:00:19

【終了】 01:00:02

CBS ニュース (Walter Cronkite, Eric Sevareid and Bob Schieffer) によるジェラルド・フォード (Gerald Ford) 大統領へのインタビューの録音¹。ウォーターゲート事件によるニクソン (Richard Nixon) 大統領の退任を受け、副大統領であったフォードが大統領となつたばかりの頃のインタビューである。前任のニクソン政権より引き継いだベトナム戦争における停戦の可能性とアメリカ軍の引き上げに関して、フォード大統領は言及している。また副大統領ネルソン・ロックフェラー (Nelson Rockefeller) や次の大統領選キャンペーンについても言及している。外交の問題について、ヘンリー・キッシンジャー (Henry Kissinger) を大統領補佐官に留任させる意思を明言している。ベトナム戦争の問題だけでなく、中東、特にパレスチナ人の問題に関して、イスラエルとエジプト間の取り決めに関する言及している。

¹この放送については、1975 年 4 月 17 日の『ニューヨークタイムズ』紙に詳細が掲載されている。 ‘A Live Ford Interview Set Monday by C.B.S.’ “The New York Times” April 17, 1975. <https://www.nytimes.com/1975/04/17/archives/a-live-ford-interview-set-monday-by-cbs.html>

005 IMIN #2

【ファイル名】HTC_005_wav01
【ホストスピーカー】不明（女性）
【ゲストスピーカー】ノグチ、太田達一
【言語】日本語
【放送日】不明
【開始】00:00:00
【終了】1:03:10

【00:00～30:33】ノグチ

福岡県田主丸の出身のノグチという男性に対するインタビュー。農家の出身で、家業を継ぐのが嫌で横浜へ出た。ノグチが船乗りとして働いていた当時、ハワイに帰港する時があった。友人に誘われて酒を飲んでいるうちに、乗っていた船が出発してしまい、そのままハワイに住むことになった。ノグチは1926年に結婚した。ハワイに住むことになった後も、漁船に乗ってシアトルに行くなど様々なところに行く生活をした。ある時、船が座礁してしまった。無人島に行きついたが、潮の流れが速く島に上がれなかった。泳ぎが得意なマエサカという人が泳いで助けを求めるようとしたが、マエサカは溺れて死んでしまった。ノグチは食べ物も水もない島で24日過ごしたという。鳥を捕まえて塩水で茹でて食べて生きながらえた。

【31:26～49:47】

1901年11月にハワイに渡った太田達一はワイパフの不動産王と呼ばれている。

006 裏千家上原先生公演

【ファイル名】 HTC_006_wav01

【ホストスピーカー】 N/A

【ゲストスピーカー】 上原ゆくお

【言語】 日本語

【放送日】 1972年8月1日

【開始】 00:00:19

【終了】 01:00:02

裏千家上原ゆくおによる講演。ハワイの略史と日系人についてと題し語っている。ハワイ略史では、ホノルルの語源を紹介し、ハワイ諸島の成り立ちから説明を始めている。

26分47秒ごろから、ハワイの日系人史を語っている。ハワイ日系人のはじめとして中浜万次郎の話から始めている。その後、カウアイ島にサトウキビプランテーションができたことから外国から労働者を入れようと日本人移民が始まった。日本人の集団移民の流れを元年者、官約移民、私約移民、自由移民の時代として説明している。その後、移民の流れは割当移民となった。1952年ウォルター・マッカラン（移民国籍）法が制定され、帰化不能であった一世もアメリカ国籍を取得することができるようになった。昨今では、ハワイ日系人の中にも異人種間結婚も増えてきた。日系人は人数も多いので、あたかもハワイ日系人だけの世界があるかのように感じるが、ハワイ日系人の問題はハワイの問題であり、他の民族グループに関連する問題でもある。上原は、問題を大きく捉えて考えていくことが必要だと話を締め括った。

009 John Burns

【ファイル名】HTC_009_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】John A. Burns など

【言語】英語

【放送日】1975年4月7日

【開始】00:00:08

【終了】01:03:15

【00:08~29:06】ジョン・バーンズ (John A. Burns) について

1962年から1972年までハワイ州知事を務めたバーンズの生涯を特集したKGMBニュースのスペシャルリポート。司会者の語りの合間に、関係者のインタビューが含まれている。

1913年、バーンズは4歳で母親と弟とともに、父が勤務していたハワイに移動した。ハワイ大学在学中の1931年に結婚した妻のベアトリス(Beatrice Van Vleet)は米軍看護師だった。バーンズ夫婦に子どもは3人ある。1958年、母アンが死去した。

バーンズは1941年1年にはFBIとともに開戦前のスパイ容疑の調査をおこなった。第二次世界大戦が始まると、FBIが1444人の日系人を逮捕し、収容した。このうち534人はアメリカ市民であった。逮捕されたある日系人の回想によると、バーンズは日系人の逮捕に対して、相反する感情が同居していた。日系二世がアメリカに対する忠誠心を証明するために第100大隊、第442連隊としてアメリカ軍に従軍した。従軍した二世はGIビルを獲得し、高等教育を受け、民主党に参加し始めた。こうして日系人はバーンズと関わりを持つようになった。戦後バーンズは警察をやめ、政治と民主党にかかわったが、初当選を果たすまでに4回落選した。

ILWU (International Longshore and Warehouse Union)は、戦時から据え置きであった労働者の給料を上げることに成功した。1946年、79日間のストライキが起こり、組合が給料の改善と政治的信条の自由を勝ち取った。マッカーシズムの広がりの中で、ILWUは共産主義者の集まりであると攻撃された。1951年、ILWUリーダーのジャック・ホール(Jack Hall)とその他6人が共産主義共謀の容疑で裁判にかけられ、バーンズは裁判で証言をした。1950年代後半に最高裁がこの訴訟を取り下げたとき、ILWUとバーンズは政治的仲間となった。

1954年ハワイで民主党革命がおこったとき、バーンズは惜しくも連邦議会代議士(Congressional delegate)の座を逃したが、1956年に当選した。議員として、East-West Centerを推進し、また「立州の父」として知られるようになった。バーンズは、ハワイの3分の1ほどが白人であったが、合衆国憲法のどこを見てもアメリカは白人の国であるとは書いていないとし、3分の1のためになく3分の2のために働くと言った。アラスカを先に

立州させ、ハワイを翌年の 1959 年に立州させた。1961 年、州知事に当選。初等教育と高等教育の政策に力を注いだ。現在ではバーンズの名前を冠した教育機関がある。1963 年、国外からの投資を得るためにバーンズは日本を訪問した。ベトナム戦争では、アメリカ軍の部隊を訪問。在任中にハワイは経済成長を遂げた。建築ブームのさなかアラモアナセンターが完成し、都市が倍増する一方、砂糖やパイナップルの生産が減少した。1971 年から経済が衰退、1972 年には公立学校の教師がストライキをおこなった。バーンズが議員であった期間、問題もあったが、土地使用法 (Land Use Law) 成立などの功績が大きい。1973 年、バーンズは外科手術を受けた。その後、入退院を繰り返し、1974 年公に最後のメッセージを発表し、知事代行としてジョージ・アリヨシ (George Ariyoshi) が執務することになった。

【29:08~01:03:15】コマーシャル、ホームドラマ

010 John A. Burns

【ファイル名】HTC_010_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】N/A

【言語】日本語

【放送日】不明

【開始】00:00:12

【終了】00:10:02

故バーンズ前州知事の回想シリーズ最終回。バーンズの人となりを紹介する番組。この回では、人を愛し、自然を愛するバーンズを理解できるエピソードを紹介するという。1970年議会を通過した墮胎手術を合法化するという墮胎法案について説明された。

バーンズはローマカトリック教の信者で、人工墮胎に反対する教えを信じていた。法案は議会通過後、バーンズ知事に拒否権を行使されるかと思われたが、拒否権行使期間45日を過ぎても、バーンズは法案を拒否しなかった。墮胎法案は自然立法（拒否もしないし署名もしないというやり方、法案を黙認）の形で州法に加えられることになった。

自然立法に当たってバーンズ知事は声明を発表した。「この法案には署名しない。有識者と意見を交換して、神に祈り、署名をしないことを決定した。州知事であったとしても言論の自由は失われない。州知事としての判断とバーンズ個人としての判断が違ってもよい」として、個人としては墮胎を容認しないが、知事としては法案を黙認した経緯を説明した。「個人的な宗教思想のために法案を拒否することはできない。それは職権乱用になる」としながらも、「墮胎は殺人であると信じる」と発言した。バーンズの妻は3人の子どもを産んだ。ボリオにかかった妻は医者に母体が危険だからと墮胎を勧められたが、バーンズ夫婦は断固反対し、妻は出産した。こうしてジェームズ・セイシロウ・バーンズ(James Stanton Seishiro Burns)が生まれた。その後、ジェームズは2児の父となった。母体や胎児がどうなるかは医学が進んでもわからない。以上の道徳的理由から墮胎には反対であるが、政治をおこなう以上、特定の場合の墮胎手術を認可しなければ秩序が得られない状況があるとバーンズは語った。

また、バーンズは、「1969年の法案はやみくもに墮胎を認めるという法案で、道徳観念が失われているものであり、拒否した。今回はそれを踏まえて改善されたものであり、あえて拒否せず自然立法の形を取った。巷では法の目を逃れ墮胎手術が頻繁におこなわれている。これらをすべて規制するよりも、節度のある墮胎を認めることは賢明な措置である。道徳理念は時代とともに変わり、それが民主主義の理念である。生命の尊さをハワイの人々は良く知っている。墮胎法にこだわらずに良きハワイの確立のために努力したい」というメッセー

ジを発表した。このメッセージに、知事として、一個人としてのバーンズを見ることができる。

012_Voice of America

【ファイル名】HTC_012_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】ゴトウケンジ、フルヤ・キエツ（古谷嘉悦か？）

【言語】日本語

【放送日】1958年9月20日

【開始】00:00:10

【終了】00:10:02

ワシントンから放送。コーナーは、「ハワイだより第10回」と、「アメリカの人工衛星について」である（しかし、冒頭にアナウンスがあった人工衛星については、番組最後まで言及がなかった。）。

【00:00~22:40】ハワイだより。

ハワイにおける日系人経営の病院施設と一世の養老院としてクアキニ病院を紹介する。4階建てのコンクリート建築の後ろに養老院があり、家のように4棟並んでいる。クアキニ病院は58年前の1900年、明治33年に作られた。それより更に11年前のキリスト教慈善会が病院の前身である。1899年にペストが流行し、1900年ホノルル大火災が発生したとき3500人あまりの日本人が焼け出されたが、そのとき慈善会が難民に衣食住、医療手当を与えた。現在の建物は大正6年に建てられた。養老院は26年前の昭和7年から経営開始した。

クアキニ病院と養老院の院長を10年務めるゴトウケンジ医師に話を聞く。クアキニ病院には140台のベッドがあり、100人程度の日系人の開業医が集まっているほか、100人程度の「支那人」ドクター、100人程度の白人ドクターの計300人で組織されている。支払能力のあるものないものにも医療を提供する方針である。

養老院で老人の世話をするフルヤキエツ（古谷嘉悦か？）はホノルル在住歴12~3年。戦前はカウアイ島で日本語学校の校長を20年余り務めた。戦時中は監禁されて大陸（アメリカ本土）で4年過ごした。養老院は最大48人収容。演芸を見たり、碁や将棋をしたりして過ごす人もいるなど、養老院での一世の暮らしぶりを説明した。

番組では演芸会の様子も紹介された。演目は淨瑠璃「お染久松」。観客のタカダ氏や、ハヤシ・トヨジロウ氏、タナカ・ブンエモン氏、マサダ・クラヘイ氏などにコメントを聞いた。演芸を楽しんだというコメントがあった。

【22:41~28:46】ジェームズ・ミッチャエル労働長官について。

アイゼンハワー大統領に指名される。ミッチャエル（James P. Mitchell）はニューヨークの

大手デパート人事課の副課長であったが、当時から人望が厚かった。長官として労働立法に尽力し、失業手当法、労働者の保護法などを拡大、養老年金制度の拡張をおこなった。労使双方の親善に務め、労働組合の尊敬も集める。

013 U.H. "Interim"

【ファイル名】HTC_013_wav01, HTC_013_wav02

【ホストスピーカー】ボブ・スィーヴィー

【ゲストスピーカー】ロベン・フレミング, S.I. ハヤカワ

【言語】英語

【放送日】1971年

HTC_013_wav01 【開始】00:00:10 【終了】01:06:38

HTC_013_wav02 【開始】00:00:10 【終了】00:50:59

大学のパネルセッション。今日のスケジュールと明日のスケジュールについての説明。セッションのモデレーターはボブ・スィーヴィー (Bob Sevey)。パネルのテーマは大学コミュニティの責任について。大学行政の経験について講演をおこなうゲストはミシガン大学学長のロベン・フレミング (Robben Fleming, ミシガン大学第9代学長)、サンフランシスコ州立大学学長のS.I. ハヤカワ (Samuel Ichiye Hayakawa)。各講演のあと、講演者同士のディスカッション、フロアからの質疑がおこなわれる。

HTC_013_wav01

【06:10～38:41】ロベン・フレミングの講演。

大学行政システムについての実際的な問題について。

【40:39～01:06:38】ハヤカワの講演。

公民権運動の中での大学について。大学と警察の役割について。

HTC_013_wav02

【00:10～01:07】ハヤカワの講演。

【01:37～50:59】質疑応答

014 Spark Matsunaga

【ファイル名】 HTC_014_wav01

【ホストスピーカー】 スパーク・マツナガ

【ゲストスピーカー】 N/A

【言語】 英語

【放送日】 1966年1月17日, 24日, 31日, 2月8日, 3月14日, 4月4日, 24日

【開始】 00:00:27

【終了】 00:35:37

【00:27～05:30】 マツナガによるワシントンからの週間レポート①

退役軍人の教育を保障する GI ビルについて語る。第二次世界大戦や朝鮮戦争のときと同様、ベトナム戦争の退役軍人にも与えるべきである。退役軍人は就職の再調整と教育の機会が受けられる。マツナガが提案する GI ビルでは、扶養者の数に応じて月に 110 か 135、または 160 ドルの教育資金を受けられる。子どものいる 800 万人の働く女性を支える。現行の法では、子育てに関係する出費から 600 ドルが控除されるが、この金額は非現実的である。子育てにかかる全ての出費を減税の対象とする。連邦政府の労働者の生命保険の適用を 50% 増やす。ベトナムの米軍基地の撤退、福祉の拡充、税金値上げを中止。以上でマツナガの演説が終わる。

【05:31～10:30】 マツナガによるワシントンからの週間レポート②

1月 22 日に、全米の大学共同の農業研究について提言した。熱帯気候の農業についてはハワイがリーダーシップを執る。農業発展を通じて食糧生産を向上させる。余剰生産分を海外の飢えている人々に与え、世界平和をもたらす。

【10:35～15:40】 マツナガによるワシントンからの週間レポート③

1954 年からマツナガ提案のフード・フォー・ピース (Food For Peace) プログラムが開始される。1960 年中旬ごろまでには、9000 万人に貢献することができると考えている。また、環境保護への取り組みも注目に値する。ハワイ州の鳥ネネグース (Nene) を保護することは大切である。

【15:47～20:40】 マツナガによるワシントンからの週間レポート④

マツナガがジョンソン大統領と会談のためハワイを訪問したことについてワシントンからレポートする。大統領は大統領専用機エアフォースワンで、ダニエル・イノウエ (Daniel Inouye) やハイラム・フォン (Hiram Fong) 秘書らとともにハワイを訪問。マツナガと大統領はベトナムの問題について話し合い、大統領は世界平和に深い理解を示していた。ハワイ

の人々は大統領を歓迎したが、例外もあった。プラカードを掲げたデモ集団がいた。デモ活動は決して否定しないが、度を超えた人たちもあり、ベトナム反戦を主張し大統領に対し「人殺し」と掲げる人がいた。

【20:42～25:32】マツナガによるワシントンからの週間レポート⑤

ハワイの立州法7周年を祝った。パツツィ・ミンク（Patsy Mink）と共同でハワイ産パイナップルの宣伝をおこない、連邦議会議員にパイナップルを贈り、ジュースをふるまつた。7年前の1959年3月12日、323対89の圧倒的多数でハワイの立州が決まった瞬間を覚えている。ハワイはアメリカの民主主義を体現している。西と東の懸け橋である。国内的にはアジア系アメリカ人のモデルにもなっている。1954年からハワイは年7%の割合で成長を続けており、これは国内平均より大きい。

【25:39～30:36】マツナガによるワシントンからの週間レポート⑥

民主党政権に対する批判のなかで大きなものとして挙げられているのが、対応の遅さである。インドに対する食糧支援をおこなっており、これは驚くべき速さで対応をおこなった。1966年に給料の増加を保障する Fringe Benefit Act を作った。これによってハワイの2万3千人の連邦関係の労働者が給料の増加を享受できる。勤続年数に応じた増給や残業、休日出勤に対する補償もある。

【30:39～35:37】マツナガによるワシントンからの週間レポート⑦

週間レポート。ハワイの人々の収入に対する生活費、消費額の占める割合は全米平均よりも高い。食料品の高騰が原因の一つであり、更なる調査が必要である。

015 パラマ学園（釘本久春講演会）

【ファイル名】HTC_015_wav01、HTC_015_wav02

【ホストスピーカー】ホノルル教育会

【ゲストスピーカー】釘本久春

【言語】日本語

【放送日】1959年8月10日（1964年10月31日？）

HTC_015_wav01 【開始】00:00:06 【終了】01:03:12

HTC_015_wav02 【開始】00:00:11 【終了】01:03:03

ホノルル教育会主催の講演会。講演者は東京外国語大学からフルブライトの招致でハワイ大学にて日本語の研究をしている釘本久春¹。釘本は現代仮名遣いの改革の中心メンバーで、外国人に対する日本語教育、文部省の漢字登用などにかかわる。文部大臣の秘書官、ユネスコ、育英会理事にも携わる。著書に『新古今和歌集全訳』『国語教育論』『話し方の事典』。

講演内容は、政府、民間で議論されている日本語の問題、子どもの問題、運動の要約。ハワイの日本語の先生に期待し、お願いしたいことについて。ハワイの日本語、日本文化の将来、西洋文化との交流のために役立ちたい。

結論から話す。ひとつめは、日本語を言語学上の概念ではなく、広く日本人の文化、考え方、生活の集約された言葉としてとらえること。日本語は太平洋地域の第二外国語としての地位を獲得しつつある。第二に、長い歴史を持つハワイの日本語教育は、外国語として、日本文化を外国の文化として教育する実践を提示している。ハワイの日本語教育には外国人に対する日本語教育の模範的なモデルケースとなってほしい。第三に、日本語は社会的、教育的、国際的観点から議論されていることを紹介したい。

社会的な立場から日本語を考えてみる。改めるべきところは改めながら、国語の社会的機能を高めていくべきである。学歴によって使える漢字に格差が出たり、思想や表現が制約されたりしないように使う漢字、読み方、スタイルに範囲を設ける。社会的機能の上から言語を考え、古い状態のままでは機能に障害が出る場合は、直さなければいけない。

教育的観点から日本語を考える。言語によって人間は作られる。乱暴な、卑俗な言葉を使っていると人間は下等になってくる。高尚な人間は良い言葉遣いをしている。晴の場で晴れ着を着るように、言葉も晴の言葉を身につけることが必要である。非行と言葉の乱暴さには関係がある。

国際的観点から日本語を考える。日本人は英語を学んできてもシェークスピアを論じる

¹ 国語学者、国文学者として以下の Wikipedia 情報あり。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%98%E6%9C%AC%E4%B9%85%E6%98%A5>

ことができない。英語教育は失敗している。日本語教育についても研究して、無駄を省いて本格的な教育を考えるべきだ。

日本語を易しくして使いやすくした国語改革は進駐軍の圧迫によるものではない。マッカーサー (Douglas MacArthur) のもとで国語課長をしていたが、日本語について進言を受けたことはない。国語改革は、知識を全国民に通わせる目的で戦前から、明治時代から始まっていた。日本の歴史を見ると、漢字を使いやすくした仮名は日本最大の発明である。日本は歴史的に見て平和を愛する国であり、封建時代、名君は民衆を大切にしていた。古いものを大切にしながら新しいを取り入れていくべき。国語を使いややすく、分かりやすくすることは、伝統に対する反逆ではない。

016 Dick Gima Show 丹波哲郎氏

【ファイル名】HTC_016_wav01、HTC_016_wav02

【ホストスピーカー】ディック・ギマ

【ゲストスピーカー】丹波哲郎

【言語】日本語/英語

【放送日】1965年10月3日

HTC_015_wav01 【開始】00:00:03 【終了】00:45:40

HTC_016_wav02 【開始】00:00:00 【終了】01:01:17

【HTC_016_wav01、HTC_016_wav02の08:28まで】Dick Gima Show

ハワイを訪れている丹波哲郎をゲストに迎えた番組。トークの合間に日本の歌が流れる。英語の質問に英語で答えている。

刀剣の話。丹波は刀剣をコレクションしていたが、日本刀「村正」を最後に今は全て手放した。監督とプロデューサーの違いについて。商業的責任を負うのがプロデューサーの役目である。総予算7000万円の映画を上映7カ月で回収できればその映画は成功である。「コレラの城」は松竹では成功した。200億円の制作費、20世紀フォックス制作で「カスター将軍」という映画の話が進んでいる。ピーター・オトワール、もしくはグレゴリー・ペックが主演で、三船敏郎、岡田英次や丹波がインディアンの酋長役で出演する予定である¹。

キスシーンについて。本当に好きな女優とキスシーンをすることはほとんどない。若く経験のない女優さんとはやりづらく、心臓の強い女優さんとはやりやすい。プロデューサーとして役者を集めますが、よいアクター・アクトレスはなかなかいない。鰐淵晴子はギャラが高いが、トップの女優である。

妻の病気について。小児まひで歩くことができないが、よくなっている。義隆という10歳のこどもがいるが、ギルと呼んでいる。

海で遊ぶのが好きである。海に潜って魚や岩を見るのが好きである。

250本の映画に出て、様々な役をやった。悪い男の役も多かった。「朝鮮（韓国）」からギャング映画についてアドバイスを請われている。昔は本物の拳銃を使って空砲を出していた。

トークの合間に流れた曲は以下のとおり。

03:02～06:19 藤本二三吉「祇園小唄」

14:50～15:06 円山鈴子「島の小唄」（カットされている）

¹ 1968年公開の20世紀フォックス”The Legend of Custer”には、丹波自身や丹波が話したどの俳優も出演していない（<https://www.imdb.com/title/tt0820915/>）。

24:20～25:20 朝丘雪路「想い出のサンフランシスコ」（カットされている）
30:26～30:33 「赤とんぼ」（カットされている）
36:21～36:49 都はるみ「アンコ椿は恋の花」（カットされている）
45:28～45:39、HTC_016_wav02 の 00:00～2:28 小林幸子「ちびっ子数え唄」

【HTC_016_wav02 08:32～01:01:17】「民謡お国巡り、伝説とおとぎ話を訪ねての旅」
日本のおとぎ話を紹介する番組、「民謡お国巡り、伝説とおとぎ話を訪ねての旅」4回分の
録音。提供はワイキキのニューオリンズカフェー。番組で取り上げた話は、大江山の「酒呑
童子」(194回、途中から)、「坪坂寺のお里、沢一」(195回)、「桃太郎」(196回)、「播州皿
屋敷」(197回)。ナレーション、歌、音楽、歌舞伎の演目を織り交ぜて紹介される。おとぎ
話の発祥の地についての説明がある。

Jack Tasaka16

【ファイル名】16Tasaka2001-08-14-3A

【インタビュイー】ジャック・タサカ

【インタビュアー】鈴木啓

【録音日】2001年8月14日

新聞記者の名前は残っているが、新聞の外交員の名は残っていない。新聞を支えたのは外交員だった。オバタ・タイセイという人は一生を外交員として過ごした。日布岳（にっぷだけ）というしこ名で相撲もしていた。ハワイの相撲の歴史については資料が少ない。タサカがオバタから聞いて集めたものしかない。先輩から受け継いだものを、鈴木のような次の世代に残したい。タサカの資料を目当てに、卒業論文やマスターの論文（修士論文）を書く学生、放送局が訪ねてくることもある。タサカは真剣な人には減私奉公で協力している。いつも「今日が最後だ」と思ってその日を生きている。苦しまずに、寝ているとき安楽に死にたい。タサカの母は、83歳のとき広島で、大みそかに紅白歌合戦を見て家に帰り、正月の朝お供えをして正装して、こたつに入ったまま亡くなった。兄は80歳で、いつも通り夕方酒を飲み、お茶漬けを食べたらのどに詰まって亡くなった。妻が医者に連絡したが、医者がおらず警察に連絡したところ事故死となった。タサカは血圧を下げる薬を飲んでいる。煙草はやめられないが、酒は少なくしようとしている。日本から来た人に3食を作ってもらっている。歌謡曲をよく聞き、日本のビデオも見ている。

日本語ができる人は少なくなり、日本語新聞では英語欄が増えている。現在の日系の新聞は広告ばかりで読む部分が少ない。ギブアンドテイクではなくテイクアンドギブになっている。残したい記事が少ない。ハワイの日本語社会を牛耳っているのは沖縄系である。しかし、沖縄系は日系とは別のグループとして自らを位置づけようとしている。

2人で人名録を見る。静岡移民は、焼津からの密航者が多い。ハワイ島コナに来て、パーカーランチでカウボーイをしていた人もいる。ワイマナロは脱走者、コナは密航者が多かった。戦後半年～1年後、今までに密航した人には罪を問わず、永住権を与えることになった。移民局の真ん前にいて、10年間移民局の人に食事を与えていた人がいたが、密航者だった。灯台下暗しだった。タサカがその人に保険を売ったあと、身の上話を聞いた。別の人で、和歌山市民図書館の移民資料室を創設する際、資料を集め、朝日野球団の世話をし、妻のコーヒーショップ内に観光局の事務所も構えていた人がいた。勲章に推薦されたが、両親が和歌山からの密航者だった。結婚もしたが書類は適当にごまかしていた。

壳春婦が偽装結婚で入ってきたこともあった。

017 ボリビア山畠勝美牧師、 よしのすいから（ホノルル動物園）、柴山金慶老師

【ファイル名】HTC_017_wav01、HTC_017_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】山畠勝美、柴山金慶

【言語】日本語

【放送日】1965年1月28日、1965年1月36日(?)

HTC_017_wav01 【開始】00:00:31 【終了】00:56:57

HTC_017_wav02 【開始】00:00:10 【終了】01:09:19

HTC_017_wav01 【00:32～26:44】ボリビア山畠勝美牧師

ボリビアで伝道をする山畠勝美氏をゲストに迎え、ボリビア日系コミュニティの現状について語る。山畠牧師は日系コミュニティのために学校を設立した。日本人だけでなく現地の教員も雇い、日本語だけでなくスペイン語も用い、ボリビアの教育システムに沿った学校教育を提供している。

HTC_017_wav01 【26:49～55:25】「よしのすいから」

ホノルル動物園で出会った日系人(タキモト氏)にインタビュー。明治16(1883)年生まれのタキモト氏は明治41(1908)年にハワイへ渡ってきて在布50年になる。ホノルル動物園へはよく通っているという。「なーなーのおじさん」と呼ばれているフチセ氏にインタビュー。1940年9月11日に引退をしてからホノルル動物園に毎日欠かさず通っている。事務員とも仲良くしており、疲れたときは事務所で休ませてもらったり、お返しに仕事を手伝ったりとしている。

HTC_017_wav02 【00:00:10～01:09:19】柴山金慶

禪僧である柴山金慶老師による、禪についての講演会。参加者には表千家、裏千家、そして華道の関係者が集まっている。流派を超えた禪から見たお茶について語る。「道」という漢字がついている以上、茶道や花道は人間性を高めるものでなくてはいけない。つまり、技術だけではなく、精神がしっかりとといなければならない。技術は時代とともに変わっていくもので、場所が変わっても違う技術があって当たり前である。しかし、精神は変わらないものであり、それを表現することが非常に重要である。ただ自分が楽しむだけでなく、自分に厳しい一面を持つことが茶人・華人には必要だという。

018 何でも聞いてやろう

【ファイル名】HTC_018_wav01、HTC_018_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】平田、我那覇武三、フレッド・藤田

【言語】日本語

【放送日】1965年10月31日、9月19日、10月3日

HTC_018_wav01 【開始】00:00:26 【終了】00:28:14

HTC_018_wav02 【開始】00:00:00 【終了】01:02:44

トーク番組3回分の録音。番組名は不明だが、ケースに「何でも聞いてやろう」と記載。ジャーナリスト、アナウンサーの取材レポートや政治に対する意見、経験が語られる。

HTC_018_wav01【00:00:26～00:28:14】ジャーナリスト平田の取材レポート。

聞き手は女性。平田は取材のためグアムに2回訪れたことがある。前回はグアムに日本兵が現れたというニュースのために訪問。今回は漁船「たいほうまる」などがグアムとオーストラリアの間で台風に巻き込まれ遭難し208名が行方不明になったというニュースのために訪問¹。日本のニュースでは消息を絶ったということだけだったが、実際は、船は全焼し浮袋で救助された乗員もいたという特ダネを見つけた。

グアム島の歴史、文化について。グアム島にはポリネシア民族がいる。ポリネシア民族は包容力がある。スペインが統治していた関係で、フィリピン人の政(治)犯も入ってきていた。独立していた歴史が短いので、人びとを受け入れてくれて親切である。日本兵は残虐だったにもかかわらず、日本兵を助けようしてくれた人もいる。政府関係の仕事と軍夫の仕事をしている人が9割である。グアムは湿気が多く、食べ物は塩辛い。グアムには基地がありベトナム戦争で使うB52があるが、島民は平静である。アメリカはグアムに学校を建てているが、これが将来良い効果を生むであろう。

HTC_018_wav02【00:00:00～01:02:44】「沖縄グラフ」の我那覇武三の取材レポート。

聞き手は女性。ハワイに1年半滞在している「沖縄グラフ」の我那覇武三の取材レポート。沖縄とハワイは似ているから行ってこいと言われて、滞在している。新聞は懸け橋の役

¹ 1965年10月7日に発生したマリアナ海域漁船集団遭難事件として記録がある

(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%82%A2%E3%83%8A%E6%B5%B7%E5%9F%9F%E6%BC%81%E8%88%B9%E9%9B%86%E5%9B%A3%E9%81%AD%E9%9B%A3%E4%BA%8B%E4%BB%B6>)。

割を担っている。自分は右でも、左でもない。沖縄を訪問した佐藤栄作首相について。訪問してくれたことはよかったです、強い策を打ち出すことはなかった。沖縄からベトナムへB52が出発したばかりで訪問のタイミングも悪かった。若者のデモ参加について。気持ちは分かるが、発散する場所がないのではないか。基地がなければ経済的に悪くなることは明らかだ。米軍のものを自衛隊に払い下げてもらって、自衛隊が沖縄に入ればよいのではないか。

HTC_018_wav02【00:30:36~00:30:21】フレッド・藤田のハワイの日本語放送史の回顧。

聞き手は女性。帰米二世のアナウンサー、フレッド・藤田のハワイの日本語放送史の回顧などについて。藤田は戦前 KGU に所属しており、1941年12月7日夜、ハワイに戒厳令が布告されたニュースを放送した。その後、兵隊に入り日本へ進駐し、KPOA に入った。ホストの堀内とは、所属は他局であったが、一緒に放送の勉強会をしていた仲である。藤田は長く東京に住んでいた。真珠湾攻撃の日の思い出について。それは日曜日で、朝6時から8時は藤田の放送時間だった。その日の7時57分に日本軍が真珠湾を攻撃をした。放送後、朝食を食べてアパートに帰るとき、真珠湾のほうから黒い煙が見えた。日の丸のマークを付けた飛行機が低空飛行しているのも見えた。夕方になってから戦争が始まったことがわかつた。昔は NHK の放送をハワイで多く流していた。水泳の古橋（廣之進）の試合の放送が思い出深い。

019 わたしの人生読本

【ファイル名】HTC_019_wav01、HTC_019_wav02

【ホストスピーカー】大巴賢充

【ゲストスピーカー】安藤玄三郎、粟村徳喜、清水逸美、古屋熊次、古生美男、長尾潤道

【言語】日本語

【放送日】4/12, 4/26, 5/2, 5/10, 5/17, 5/24

HTC_019_wav01 【開始】00:00:19 【終了】01:02:26

HTC_019_wav02 【開始】00:00:39 【終了】01:02:44

ゲストの人生について

HTC_019_wav01 【00:19～18:01】安藤玄三郎

アイスメンという仕事について。1918年ごろから会社の従業員として仕事を始めた。今は機械で氷を切るが、昔はノコギリで切っていた。氷の需要は晴れの日も雨の日もあるので、年中無休で働いた。

HTC_019_wav01 【18:24～40:10】粟村徳喜

時計家という仕事について。貴金属なども取り扱い、戦時中は現金に不安があり、貴金属の需要が増えた。

HTC_019_wav01 【40:13～1:02:26】清水逸美

農家という仕事について。農家のアソシエーション、ハワイ・ファーマーズを作った話。元々はファーマーズ・エクスチェンジという名前で、リバーストリートにあった。歴代の会長には、マウイ島のニシダバンゾウやハワイ島の火山社社長タナカヤロクがいた。ワカバヤシという日本人の農業学者がアメリカ本土の大学で学んだ後、ハワイの農業の発展に貢献した。

HTC_019_wav02 【00:42～21:46】古屋熊次

1912年からステート・ファニチャーという家具屋を営んでいる。友達何人かで集まって会社を始めていたところに、参加したのが始まり。1908年ごろくらいには、他の島で働いていた人たちも、少し余裕が出てくるとホノルルに集まってくるようになっていた。

HTC_019_wav02 【22:04～42:07】古生美男

古生は明治16年生まれ。日本では岡田式静座法を習い、ハワイに来てから座禅を始めた。

以来 60 年、朝晩座禅を組んでいる。抑留時代も、他のお坊さんたちが怠けて続けない中、古生は座禅を続けた。長生きの秘訣は精神を健康に保つことだと語る。古生は杖をたくさん集めている。アメリカ本土での抑留所生活中でも杖をいろいろと集めて買っていた。ハワイに送るための抑留者の集合写真でも、古生は杖を持って写っていた。その杖は歩くようではなく、趣味として集め持つものである。

HTC_019_wav02 【42:16～59:42】長尾潤道

長尾は、ナガオ・グラージ (Garage) を営んでいる。ハワイ島ケアラケクアでコモトリュウセイという剣部の師匠がいた。日本語学校の先生に勧められて、まず兄が習い始めたことに成了。それに同行してまねごとをしているうちに、武闘家としての人生が始まった。コモトの後を継いで、シンリュウ館を任せられるようになった。長尾は詩吟もたしなむ。

020 日系部隊クラブを訪ねて

【ファイル名】HTC_020_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】ファラント・ターナー、ミヤケ・ヨシヒコ、サトウ・トミヤ

【言語】日本語

【放送日】1958年9月8日

【開始】00:00:00 【終了】00:29:41

ワシントンから放送する Voice of America (VoA、アメリカの声) という番組の「ハワイだより」第11回、テーマはハワイの二世部隊クラブについて。

ハワイの二世は第二次大戦中、第100大隊や第442部隊などに所属し、ヨーロッパ戦線で戦い、日系人のアメリカにおける地位向上に大きな役割を果たした。第100大隊の復員者からなる第100大隊クラブを訪問して活動状況などを聞いた。クラブ100(ワンハンドレッド)と呼ばれホノルルの名物となっているクラブハウスがアラワイ運河のそばにある。

ファラント・ターナー (Farrant L. Turner¹) はポップ (Pup、おやじさん) のニックネームで親しまれ、第100大隊の元大隊長であり、現在（放送当時は）ハワイの副知事である。第100大隊クラブの発足についてターナーに話を聞く。シェルビー兵営での訓練中に、隊員から月2ドルずつ会費を集め、5~6万ドルの資金を元にクラブハウスを建築した。第100大隊は330人の戦死者を出したが、生き残った隊員が会員となってクラブハウスを維持している。

クラブ100会長で日系二世、弁護士のミヤケ・ヨシヒコに活動について話を聞く。100大隊クラブは社会や同僚に奉仕することを目的としている。会では、三橋美智也、大津美子などを招聘して基金を募集し、社会のために役立てている。美空ひばりも呼ぶ予定である。

クラブ主事のサトウ・トミヤに話を聞く。中隊ごとにいろいろな催しをしており、最近は隊員の父母を招いた「我が父母の日」を開催した。隊員のワイフもクラブハウスに集まり、ドレスを縫ったり、生け花を教わったりしている。隊員のなかには朝鮮戦争に従軍した人もおり、朝鮮の旗が飾ってある。現在も会費を集めており、収入は公共事業に充てている。美空ひばり公演の際には、クアキニ病院に寄付する予定である。

来週のこの時間は、ハワイのアメリカ市民と結婚した日本人女性について伝える。

セントルイス市の小児科病院の活動紹介。心臓の内壁に穴がある患者のダイアン・エドワード君に焦点を当てる。ダイアン君の病気は回復の見込みがなかったが、新聞で寄付金を集

¹ ターナーについては第100大隊のホームページにも記載がある

(<https://www.100thbattalion.org/history/veterans/officers/farrant-turner/>)。

め、ポンプの役割を果たすギボンメイヨー²心臓肺臓機械を手に入れ、全身の血液の量をコントロールすることができるようになった。結果、心臓の穴をふさぎ、ダイアン君は今も元気に生活している。

ジョン・ケネディー上院議員の横顔。2年前の1956年、民主党の大統領候補者スティーブンソン(Adlai Stevenson II)を紹介する演説をおこなったケネディーは、当時無名の青年であった。副大統領候補に指名されたが僅差で敗れた。家族や生い立ち、著書からケネディーをとらえる。

² Mayo-Gibbonと呼ばれる人工心肺装置のこと
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%BA%E5%B7%A5%E5%BF%83%E8%82%BA%E8%A3%85%E7%BD%AE>)。

021 私の人生読本

【ファイル名】HTC_021_wav01、HTC_021_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】中島将弼、明治神宮権宮司 伊藤翼、下田健一郎領事、井上ゴードン覚司

【言語】日本語

【放送日】1965年

HTC_021_wav01 【開始】00:00:00 【終了】00:29:41

HTC_021_wav02 【開始】00:00:00 【終了】00:29:41

HTC_021_wav01 【00:00～31:19】中島将弼

武闘家という仕事について。中島は兵庫県生まれである。父も武闘家で、神影流を学んだ。中島は25歳で酒を絶った。それは、第二次世界大戦で中国に攻めたとき、酒を飲んで部下が粗相をしてしまった事件がきっかけである。粗相に対して怒った特務曹長が部下に体罰し叱ったので、中島は随分と年上である特務曹長に対して刀を抜き殺してしまった。その結果、中島は官位剥奪になり、軍法会議にかけられた。その際、ウシジマ中将が嘆願書を提出してくれたので、中将が亡くなるまでは酒を飲まないように決めたという。

HTC_021_wav01 【31:29～58:06】明治神宮権宮司 伊藤翼

伊達は、蒲田八幡神社のウエノヨシノブ宮司とともに、アメリカ本土で行われる国際宗教史学会参加のため、ハワイを訪れた。日本の明治以降の神社の様子、特に第二次世界大戦中・後の神社の様子を語る。第二次世界大戦後、日本の神社は苦境に立たされた。人々の生活が立ち直り始めると、だんだんと人々が神社に戻ってきた。蒲田八幡神社の一面は焼け野原になった。昭和25年から5年程度かけて、氏子が神社の周りに戻り、復興を始めた。

HTC_021_wav02 【00:27～27:35】下田健一郎領事

下田の趣味である詩吟について。詩吟は昭和18年から続けている。戦争中に日本文化の高揚があり、外務省の中で50人程度の有志が集まり、下田もその一人として詩吟を始めた。詩吟は昔の人の気持ちを理解することができるという利点がある。

HTC_021_wav02 【27:40～50:29】井上ゴードン覚司

井上は大分県出身の天理教伝道師。10年前にハワイへ渡った。ゴードンという名前はアメリカの市民権を得たときに保証人の勧めで付けた。東京の青山学院大学に学んだが、在学時に下宿していた叔父の影響で熱心な天理教信者となった。議員などに立候補するも、息子

の病気などあり、叔父の勧めで天理教伝道の道へ進んだ。

022 なんでも聞いてやろう

【ファイル名】HTC_022_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】重永茂夫、高木弘一

【言語】日本語

【放送日】不明

【開始】00:00:00

【終了】00:28:14

第三回海外日系人大会に参加した、ホテルカイマナの社長重永茂夫氏と外務省移住局長高木弘一氏の対談。この対談は6月27日に日本短波放送で「世界に開く窓—ハワイの日本人」というタイトルで放送されたものである。

ハワイの日本人の歴史について説明している。ハワイの日本人の歴史の始まりは、日本の鎌倉時代にマウイ島カフルイへ漂着した日本人男性5名女性が4名、子供1名だと説明する。文献上残っている古い日本人は、明治元年400名余りの日本人移民である。これは元年者と呼ばれ、彼らをたたえる石碑もたっている。大正6年、16歳の時にハワイへ渡った重永は、当時61歳であった。重永は日本移民75年祭を執り行った。戦前の海外移住と、戦後の海外移住の違いについて語っている。日本人は出稼ぎ根性を捨てて、移住先の社会に好かれるようになじんでいく必要があると語っている。

023 Voice of America、アメリカの声

【ファイル名】HTC_023_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】マスナガ・スズコ、タカハタ・ルリコ、アレハド・チズコ

【言語】日本語

【放送日】1958年9月8日

【開始】00:00:11

【終了】00:29:42

「ハワイだより」第12回は、ハワイの新しい市民について紹介する。ほかに、原子力の平和利用について伝える。

戦後ハワイの人たちと結婚し、ハワイに住む女性の座談会。戦後13年の間にアメリカ人と結婚した日本女性は3万に上り、その一部はハワイで暮らしている。ハワイの日本女性はプアプメハナ（pua pumehana 暖かい花との意味）クラブを組織している。神戸市出身、昭和23年渡米でプアプメハナクラブ創設者のマスナガ・スズコ、東京都出身で現クラブ会長タカハタ・ルリコ、佐世保市出身で昭和28年に渡米した書記のアレハド・チズコに話を聞く。

クラブの名前は、ハワイ語がいい、日本語がいいという意見があり、投票を取って決めた。活動は月一回、ホノルルの国際教団で趣味（生け花、裁縫、絵画）の講習のほか、艦隊の歓迎会を開いたり、日本人留学生に奨学金を渡したりしている。奨学金はスイートブレッドを売ったり、映画上映をしたりして基金募集をして集めた。

3人とも子どもは2~3人いる。夫は軍関係の仕事や計理士をしている。マスナガは自身も『ハワイ報知』の新聞記者として働いている。みな衛生、医療設備、気候、食事の点でハワイを気に入っている。姑との関係は良好である。気に入らないことがあったとしても、日本から来たからという理由のため、大きな問題にならない。ハワイにおける結婚生活は特別に大変ということではなく、不幸や不運はどこでも起こりうることだと語る。ハワイ大学教授ヤマムラの統計によると、日系人女性は日系や他の人と結婚しても、離婚率が低いという。日系人男性が日系人以外と結婚した場合は離婚率が高い。

最近の原子力の平和利用について。アメリカでは、商業用として初の原子力発電所が、5月、東部ペンシルベニア州シッピングポートに完成した。この開所式にアイゼンハワー大統領が出席し、原子エネルギーは破壊ではなく福祉向上のために利用できることを全世界に示し、原子力が平和な新しい世界を約束するものであると述べた。

発電所には14トンのウラニウムが収められており、中性子を発散している。中性子と原子核が爆発すると、原子核が破壊され大きな熱量を発散する。原子核の分裂は連鎖して起こ

る。その原子分裂のためにハフニウムの棒を利用している。ウラニウムは石炭の 300 万倍の熱を発する。しかし石炭のほうが安く、取扱に危険がない。

024 East West Center Seminar

【ファイル名】HTC_024_wav01、HTC_024_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】吉田勝知、霧越明、当間洋一、山里清、豊田久承、キユナ・スグル、内藤健三・アキコ夫妻

【言語】日本語

【放送日】1964年1月12日、19日、26日、2月2日

HTC_024_wav01 【開始】00:00:38 【終了】01:05:14

HTC_024_wav02 【開始】00:00:07 【終了】01:03:08

東西文化センター（毎週日曜午後7時半～8時放送）。

HTC_024_wav01 【00:38～34:05】第10回「1学期を振り返って」

東西文化センターに滞在している、吉田勝知（埼玉県教育局指導主事、teacher's consultant, supervisor）、霧越明（高校英語教師）がゲストとして出演。霧越は英会話の習得を目標とする。ハワイでは日本語が通じて便利だが、英語の練習にならない。英語の先生が固まって住んでおり、英会話するようにしている。吉田は数学を専攻。日本の中高の数学の近代化の構想を持ち、ハイスクールや教育委員会を見てまわっている。ハワイでは、能力ごとのコースがある。霧越は、日系の家庭で戦後苦労した話を聞き、大和魂で切り抜けたことに感心した。三世四世も、大和魂を伝えていってほしい。吉田は、二世は日本ので頼もしいが、三世との間には断層を感じる。三世は豊かなときに育ったので、祖父母の精神を受け継いでいないのではないか。

HTC_024_wav01 【34:08～01:05:14】「沖縄の現状」

当間洋一（政治学、早稲田大学出身、『琉球新報』）、山里清（動物学、埼玉大学出身、琉球大学）がゲストとして出演。日本復帰の運動がある一方、米軍統治下にあった方が経済的に安定するという人もいる。東西文化センターで学ぶ人々の多くは、戦後独立した国々の出身で、異民族に支配された歴史があることから沖縄の現状に同情的である。山里は沖縄が戦後豊かになったのは基地のためではないとするが、当間は基地経済の影響が大きいと考えている。沖縄の将来について、山里は民族感情や国際社会の観点から沖縄の日本復帰を考える一方、国家概念を飛び越えた新しい地域を模索する夢がある。当間は、現在沖縄の大学は内地の形式を取っているが、英語で教育するなど独自の大学を作る必要があると考える。沖縄自身の経済力をつけて日本に復帰するのがよいが、復帰には時間がかかるだろうとも考えている。

HTC_024_wav02 【00:07～31:22】「東西文化センターの思い出、ハワイの自然」

豊田久承、キユナ・スグル(気象学専門、東北大学在学中)をゲストに迎える。キユナは1961年9月から東西文化センターに所属し気象学専攻している。ハワイの学生は日本と比べて眞面目に勉強するとキユナは感じた。イーストウエストセンターのスタディツアーでニューヨークに行ったことがある。ニューヨークは東京と似た忙しさがあり、ハワイに比べて冷たく感じた。豊田はハワイの自然を知るという目的でクラブに所属しマウンテンクライミングを始めた。このクラブ活動で、オアフ島で一番高いカアラ(Ka'ala)に登ったことが豊田にとっての思い出として残っている。そこにはグアバなど野生の果物がたくさんある。

HTC_024_wav02 【31:24～01:02:25】「家族連れの留学生活」

内藤健三・アキコ夫妻がゲストとして出演。健三は1年半前から修士課程で農業金融について学ぶ。日本では農林漁業金融公庫で働いていた。妻アキコは東京家政大学卒業後、病院で栄養士として働いていた。アキコは2カ月前に2歳の子どもを連れて健三のいるハワイに来た。ハワイはスーパーマーケットが整っており、食料品や生活用品を1週間分まとめて買えて合理的である。さらにハワイでは日本のものが何でも手に入り、日本語も通じるので生活に不便はない。子どもに国際的な経験をさせるためプレスクールに入れた。

025 ハワイ大の時間 金山II

【ファイル名】HTC_025_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】金山宣夫

【言語】日本語

【放送日】1970年1月18日

【開始】00:00:00

【終了】00:28:37

ハワイ大学教授金山宣夫による放送の2回目。テーマは未来社会のコミュニケーションについて。初回のテーマは国際適応学についてであった。

日本人の平均的なハワイに対する認知は、「パラダイス」や「観光地」などである。ワイキキやダイアモンドヘッドへのグループ旅行がはやっているが、そういった場所は軍用基地でもある。佐藤・ニクソンの間で沖縄を日本へ返還するということが決められた。沖縄もハワイと同じように不沈戦艦であるが、そこを訪れる観光客はそういった面には目を向けない。ハワイから日本に輸出しているもので一番収益を上げている品目は、軍事関連の品物である。観光客が訪れる場所に真珠湾がある。「リメンバーパールハーバー」と「ノーモアヒロシマ」の比較をすると、そこに日本人とアメリカ人の性質の差が見える。

026 Voice of America

ハワイ便り第7回『ハワイの日本語』

【ファイル名】HTC_026_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】木村寅吉、大山幸雄、オオヅ・ヨシヒコ、ヨシカミ・ススム

【言語】日本語

【放送日】1958年7月6日

【開始】00:00:00

【終了】00:31:07

放送当時、ハワイには日本人移民の開いた日本語学校が76校存在した。この放送では、オアフ島フォート通りに面する、ハワイ本派本願寺別院附属学校のフォート学園が取材されている。同敷地内には英語のミッションスクールも併設されている。ハワイ教育会によつて、日本語学校の授業料は1人4ドル、一軒から2人目の児童には3ドル50セント、3人目には3ドルと設定している。

木村寅吉（熊本県出身、モイリリ日本語学校校長）、大山幸雄（福岡市出身、フォート学園園長）、オオヅ・ヨシヒコ（カヒリユカ日本語学校校長）、ヨシカミ・ススム（広島市出身、父兄代表・ハワイ教育会会計）の4人による座談会。

木村によると、1909年ごろハワイに日本語学校ができ、各諸島に広がっていったという。1913年ごろにハワイ教育会が組織された。戦争直前には児童総数が4万人であったが、戦中の日本語禁止などのあおりを受け、戦後は学校自体が半数となった。現在の児童はほとんど三世か四世である。1957年5月1日の統計によると、ホノルル市には24校の日本語学校があり、7200人生徒がいる。ホノルル以外のオアフ島の都市には14校の日本語学校があり、3000人ほどの生徒がいる。カウアイ島では日本語学校が6校、生徒数は400人あり、マウイ島では日本語学校が11校、生徒が1000人、ハワイ島には日本語学校が21校、生徒数が1800人となっている。合計でハワイ全島に日本語学校が76校あり、生徒はおよそ1万3400人いる。フォート学園には生徒が600人おり、ほとんどが日系だが、そのうち6人くらいが白人であり、他にもハワイアンや朝鮮（韓国）系の生徒も数人在籍している。戦前の生徒よりも戦後の生徒のほうが、日本語力は劣る。修身を使って日本語を教えていることを悪くいう戦後の若い日本の日本人もいるが、ハワイの日系人や他のアメリカ人はおかしなことだとは思っていない。

027 私の人生読本

【ファイル名】HTC_027_wav01、HTC_027_wav02

【ホストスピーカー】大畠賢充ほか

【ゲストスピーカー】茅誠司、比嘉静観、キダ・カツキチ、友松円諦、沖原龍進、仲野谷庄司

【言語】日本語

【放送日】1964年3月7日、3月14日(1~4本目判読不能)

HTC_027_wav01 【開始】00:00:00 【終了】00:31:07

HTC_027_wav02 【開始】00:00:00 【終了】00:31:07

HTC_027_wav01 【00:00~22:18】茅誠司

東京大学前総長（第17代）の茅誠司がゲストスピーカー。聞き手は大畠賢充。茅は本田光太郎に師事し、東北大学、北海道大学、東京大学で教鞭を取った物理学者。師である本田が研究した磁気を持った金属について、合金について、原子の親和力についての説明をしている。茅は百姓の子で、子どものころから土に親しんでおり、植物を見るのが好きである。日本では民主主義を理解しないまま思想が入ってきたため、民主主義における自由と平等を混同していると考えている。大切なのは友愛である。また、茅は全学連と安全保障条約について触れている。学生の怒りの対象はアメリカではなく、民主的に決定しなかった日本政府に向かっている。ハワイでは成功した日本人たちがおごらずに、他の人々と一緒に立派なハワイを築いている。その考えを模範に、日本人が国際的な考え方を持ち日本を作っていくべきである。

HTC_027_wav01 【22:48~36:35】比嘉静観

メソジスト教会牧師の比嘉静観がゲストスピーカーとして登場。聞き手は女性。比嘉は宣教師のドクターシュワルツに呼ばれ、沖縄県人に伝道するため31歳でハワイに来た。酒の問題があった父と離れて暮らし、酒を飲まない宗教であるキリスト教のサンデースクールに通いはじめ、神学校に入った。子どもは日本に2人、ハワイに2人おり、比嘉は彼らの教育に熱を注いだ。牧師でありながら社会問題に关心を持ったり、教育に关心を持ち日本語学校の校長をしたりした。政治面にも興味があり、助けたい人のために政治運動をするのはよいと考えている。理想の神の国を建設するために社会、政治、教育に興味を持っている。

HTC_027_wav01 【36:45~54:56】キダ・カツキチ

キダフィッシングサプライのキダ・カツキチをゲストスピーカーに迎える。聞き手は大畠賢充。キダは14歳で和歌山からハワイへ来た。父はカツオ漁船の船長であった。以前は漁

では群れを肉眼で見ていたが、現在は双眼鏡で見るようになった。釣り方も変わり、早くなった。キダの店では、魚が寄ってくるように光る装飾の付いたルアーなどを売っている。最近は魚が少なくなり、ビーチで釣れずボートを買ったり飛行機でハワイ島マウイ島カウアイ島に行ったりする人もいる。

HTC_027_wav02 【00:26～21:35】 友松円諦

僧侶の友松円諦がゲストスピーカーで登場。聞き手は大巴賢充。友松は慶應の講師であった。小学校5年生の頃から英語の教科があり、英語好きであった。イギリスのマックス・ミューラーの本を神田の吉本屋で購入し、英語で仏教のことについて読んで感銘を受けた。本の原典を読むために語学を勉強した。大正13年ごろから慶應の仏教青年会で教え始めた。そこから始まった縁で、NHKで『法句経』を教える番組を担当し、その放送は32年続いている。友松は『法句経』の翻訳をしている。

HTC_027_wav02 【21:41～43:30】 オキハラ・リュウシン

日蓮宗ハワイ開教総長のオキハラ・リュウシン。聞き手は女性。信仰の厚い母とともに寺に通いながら育った。海軍中学校に入るなど軍人を目指していたが、身体的な条件で候補者から外れてしまった。母を喜ばせるために信仰を始めたが、母はオキハラが僧侶になることを反対した。日蓮宗大学（のちの立正大学）で学んだ。満洲では藤井日達に付いて学んだ。シアトル、ポートランド、バンクーバーに寺を建てた。アメリカで日蓮宗を信仰する人は日系だけではなく白人もいる。戦争前に日本へ帰った。乗っていた「大和丸」がアメリカの戦艦に撃沈させられ、漂流した。

HTC_027_wav02 【43:45～01:03:32】 仲野谷庄司

ゲストは秋田出身の仲野谷庄司。聞き手は大巴賢充。百姓の傍ら、劇団で太鼓をしている。目黒とワイキキグランドホテルの日本料理「ふるさと」の座敷で、秋田の演芸を披露する。仲野谷が太鼓を始めたのは10歳の頃。そのほか、三味線も演奏することができる。第二次世界大戦中には、軍用の馬を調教し戦地に送る仕事をしていた。仲野谷は今回、芸を披露する6ヶ月の契約でハワイにやってきた。ハワイ滞在は残り2ヶ月である。

028 Voice of America

ハワイ便り第7回 『ハワイの日本語』

【ファイル名】HTC_028_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】古屋昇

【言語】日本語

【放送日】1958年8月9日

【開始】00:00:11 【終了】00:29:47

【00:00～14:40】ニュース解説

安全保障理事会における拒否権の行使に関する是非について。また、黒人歌手マリアン・アンダーソン（Marian Anderson）が国連総会代表に任命されたことに関するニュースを解説している。11:54からはアンダーソンの歌声。

【14:43～29:47】ハワイ便り第9回

ハワイにおける日本映画について紹介する。ホノルルには、松竹系の映画館として日本劇場、大映系の国際劇場、東映系の東洋館、東宝系のカパフル劇場がある。入場料は大体70セントである。劇場のほかにも各地を回る巡業組がいる。

日本劇場でのインタビュー。日本劇場は放送当時で開業30年ほど、およそ800人の観客を収容できる映画館である。支配人古屋昇は山梨県出身の両親のもとに生まれた二世である。劇場は複数のバスの路線が合流するあたりにあるため、様々な方面からのアクセスが多いと話す。

熊本出身のスエマツ氏は、ハワイにきて51年の76歳である。日本から来た映画は欠かさず見ていると語る。海兵隊に所属する白人のレーガン氏は、日本にいたときに日本映画を楽しんでいたといい、英語字幕で映画を楽しんだと語る。44年ハワイに住むマツウラ氏は、上映された映画の人情や滑稽さを感じるところが面白かったと話す。19歳のハワイアンの青年、ケネス氏はたびたび友人と日本映画を見ると話す。侍映画が好きであると話す。2年半くらい前に広島へいったことがあるというオウドウ・ユキコ氏は大衆向きの娯楽映画より後世に残る作品を好むと話す。

029 Voice of America

ハワイ便り第13回（最終回）『ハワイの日本語放送』

【ファイル名】HTC_029_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】村田カンイチ、クライシ・トモミチ、熊谷チヅコ、後藤ヒロユキ

【言語】日本語

【放送日】1958年8月24日

【開始】00:00:00

【終了】00:54:39

【00:00～26:38】ハワイ便り最終回（第13回）

ハワイにはラジオ放送局が11局、テレビ放送局が4局ある。そのうちのラジオ局7局、テレビ局1局は定期的に日本語の放送をおこなっている。放送では次の4名へのインタビューをしている。村田カンイチ（KGMB放送局）、クライシ・トモミチ（KANI放送局）、熊谷チヅコ（KPOA放送局）、後藤ヒロユキ（KGU放送局）。

ハワイでの放送局の始まりは、KGU放送局が1922年5月12日に放送を開始したところにある。その次にKGMB放送局ができ、1947年以後、次々に放送局が増えていった。戦後最初に日本語放送を始めたのはKPOA放送局であった。日本語で話す放送というよりも、日本語の歌を流すもので、広告などは英語で行っていた。1947年3月半ばにKGMB放送局が日本語番組の放送を始めた。KGU放送は1951年11月1日から日本語放送を再開した。KANI放送局はオアフ島で比較的新しい放送局である。浪曲や漫才、時事問題、流行歌のようなものを流している。ハワイ日本語放送の特徴として、『死亡告知』という誰かの葬儀の情報などの告知放送や、『お誕生日の時間』という子や孫の誕生日を知らせる放送などがある。また、日本語のお国なまりや英語のハワイなまりを用いた店舗の広告なども特徴的である。

【26:39～28:37】マグサイサイ賞について

ロックフェラー財団から寄贈された50万ドルによってマグサイサイ賞財団が設立された。受賞者には1万ドルが贈られる。今年度の受賞者はインドのアチャリヤ（ヴィノヴァ）・バヴェ（Vinoba Bhave）氏、台湾のショー・ムレー（Chiang Mon Lin）博士、フィリピンにおけるイギリス人の編集長ロバート・ディック（Robert Dick）・インドネシアの編集長モクタール・ルビス（Mochtar Lubis）の共同受賞、カナダ生まれのセイロン指導者メリーラトナム（Mary H. Rutnam）博士、ベトナム・ラオスで兄弟作戦（Operation Brotherhood）

を行ったフィリピン衛生団であった。

030 私の人生読本

【ファイル名】HTC_030_wav01、HTC_030_wav02

【ホストスピーカー】大巴賢充

【ゲストスピーカー】比嘉盛勇、ロイ高桑、竹下和足、小池軍時、鳥取密明、中川兼松

【言語】日本語

【放送日】8月27日、8月30日、9月6日、9月13日、9月20日、9月27日

HTC_030_wav01 【開始】00:00:00 【終了】01:00:25

HTC_030_wav02 【開始】00:00:00 【終了】00:59:00

HTC_030_wav01 【00:00～17:41】比嘉盛勇

比嘉は20歳のときハワイへ渡った。その後は様々なビジネスをおこなった。趣味は詩で、ウチナーグチを使って書いている。沖縄の作曲家が比嘉の詩に曲をつけて、『夫婦船』という歌になった。この歌は、子どもは大きくなって巣立ってしまって、最後に残るのは夫婦2人であるので、お互いに仲良くなっているかなくてはいけないという歌である。

HTC_030_wav01 【17:42～37:58】ロイ高桑

高桑は24時間営業のリリハベーカリー店主。ハワイ生まれの高桑は、1918年、14歳の頃に一家で日本へ引き揚げると、帰ってすぐに関東大震災に遭った。その後、日本も不景気に入ったため、アメリカで仕事を探そうと1930年11月にハワイへ戻った。その後アメリカ本土へ渡り、1937年にハワイへ戻った。1948年リリハベーカリーを始めた。

HTC_030_wav01 【38:03～1:00:25】竹下和足

竹下はマノア日本語学校教員である。日本語教員歴は34、5年になる。ワイパフ日本語学校で教え始めたのが始まりである。ハワイでは二重国籍だった日本人の子どもたちの日本語教育は、いつか日本に帰ったときのために、と父兄が熱心になったものである。日本語学校でも天長節などの行事もあった。戦後には、日本に戻ろうとする家族も少なく、日本語教育はただの「語学」として受け取られるようになった。サンタフェ収容所に入れられていたときは、芝居で女形を演じた。終戦間際、収容所からハワイへ戻った当時、娯楽がなかつたのでマッキンリー高校でインタニー芝居しようと公演を開いた。

※途中で切れる

HTC_030_wav02 【00:00～23:23】小池軍時

小池はハワイ島コナ、ホルアロア出身の二世である。ア阿拉・パウンズという質屋を経営している。小池は18歳のとき、ハワイ大学へ通うためにオアフ島へ出てきた。小池の質屋

には指輪、時計、楽器、道具類などが持ち込まれるという。日本では着物や布団が質屋へ持ち込まれると聞くし、アメリカ本土でも着物を受け付ける質屋があるとは聞くが、ハワイの質屋では受け付けられない。戦争中には宝石を人が歩いて売っており、かなり質の悪い宝石が出回っていた。鑑定結果に怒る客もいた。

HTC_030_wav02 【23:27～42:25】鳥取密明

鳥取密明はリリハ大郷文教院に所属している。1925（大正14）年にオアフ島の別院に駐在するため、ハワイへやって来た。その後、マウイに10年滞在し、一度は日本に引き揚げ4年半過ごしたのち、1940年に再度オアフ島ハレイワへ渡った。

HTC_030_wav02 【42:30～59:00】中川兼松

中川兼松は14歳の頃、オアフ島アイエア耕地のプウロアに渡った。そこで1年働いたのち、ワイアナエへ移った。オアフ鉄道のセクション・メンとして、エヴァからマクアの区間を担当したという。中川が住んでいたワイアナエ（マカハ、ナナクリ、マイリなど）は、戦前の時代にはまだあまり開けた土地ではなかったが、戦後はだいぶ住民も増えた地域である。

※途中で切れる

031 私の人生読本

【ファイル名】HTC_031_wav01、HTC_031_wav02

【ホストスピーカー】大巴賢充ほか

【ゲストスピーカー】森藤貞人、新野弘、竹井時次、宮崎甚左衛門、衛藤公雄、青戸聖子

【言語】日本語

【放送日】5月2日、5月9日、6月20日、1965年8月?、1965年8月5日

HTC_031_wav01 【開始】00:00:27 【終了】01:04:08

HTC_031_wav02 【開始】00:00:34 【終了】01:05:30

HTC_031_wav01 【00:00:27~00:23:22】森藤貞人

聞き手は大巴賢充。ゲストで登場した森藤貞人は、16歳で山口県からハワイへ渡った。森藤はプランテーションで働いたことはなく、渡布当初からホノルルに滞在し、スクールボーイをして英語を学んだ。その後、商売の勉強として早稲田の講義録を学び、アメリカのドライフルーツを扱う商売を始めた。家のリース事業もしてみたが失敗した。その後、商品知識の勉強のため仲買業者として働いた。そして日系や中国系の商店を回ってショーケースを販売した。羅紗（毛織物）で服のサンプルを作つてティラーショップに売ったほか、Meadow Gold の牛乳事業にもかかわった。

HTC_031_wav01 【00:23:27~00:43:53】新野弘

水産大学の新野弘博士がゲストスピーカーとして登場。聞き手は大巴賢充。新野はボストンやロサンゼルスを周り、日本へ帰国する前に、ホノルルに滞在中である。ボストンにはGIと結婚した日本人女性がいたと語る。小説では軍人と結婚し苦労した話があるが、400人近くいるボストンの女性たちは新野が見る限り幸せそうであった。新野はブリストル大学のシンポジウムにも呼ばれた。この研究旅行の間、ついでにスコットランドにも滞在した。新野は海底地層の研究を専門としており、大陸棚の泥の調査や黒サンゴの調査を行っている。

HTC_031_wav01 【00:44:04~01:04:08】竹井時次

ゲストスピーカーの竹井時次は、今回が2度目の出演。聞き手は大巴賢充。竹井いわく、下手の横好きから、草書の習字を極めている。道具は白木屋の鳩居堂で買っている。「支那人（ママ）」の筆は柄が短く、筆を持つという点で本場であると竹井は考えている。中国の書と比べた場合に日本の書は堕落したと言われることもある。

HTC_031_wav02 【00:00:37~00:02:30】宮崎甚左衛門

長崎カステラ文明堂の宮崎甚左衛門をゲストに迎える。聞き手は大巴賢充。文明堂の東京

進出や震災の話。2分30秒まで別の音声と重なり録音されている。

HTC_031_wav02 【00:00:37～00:43:36】衛藤公雄

冒頭2分30秒間は、他番組「人生読本」と音声が重なっている。箏奏者の衛藤公雄をゲストに迎える。聞き手は女性。普通の箏よりも弦の多い「グランド箏」を紹介する。従来の箏より糸が多く、全体も大きい。長さは6尺、幅は1尺1寸で、18本糸がある。武道館でこの箏を試演したところ、音が大きく響いた。衛藤はこの箏を洋楽器と一緒に合奏している。上手に弾くかではなく、人々の期待に添い、芸術のために忠実である演奏が求められると衛藤は考えている。衛藤は箏をヨーロッパにも広めたいと考えている。アメリカ人は良いものにすぐ飛び込んでいくが、ヨーロッパは気位が高く、新しいものに飛び込んでいく意識が欠けている。

衛藤はニューヨークに住んでいたが、東京に戻ってレコード会社の専属になった。レコードにいいものを残すことを大切にしている。自分も箏の道に入った。アメリカ人が好む箏の曲は、人によって異なるので、いろいろと演奏できるようにしている。38分から45分までは聞き手のサトウが吹くフルートと衛藤の箏の合奏。

箏を紹介する番組終了後、数秒ほど、広島原爆の日の放送の録音が入っている。

HTC_031_wav02 【00:45:45～01:04:33】青戸聖子

青戸聖子による、広島の原爆の話。聞き手は女性。原爆が落ちた日、青戸は呉にいた。動員や強制疎開などで多くの学生は呉を離れており、青戸たちの学年のみが地域に残っていた。焼けた学校を同級生たちと片付けていたら、空がピカッと光った。同時に耳を割り箸で弾かれるような爆風が届き、あたりは騒然となった。山の向こうに一本の柱のような煙が立ち、そのうちにキノコのような形になった。色も白からピンク、赤、そして真っ黒へと変化した。この爆発がまさか原子爆弾とは思いもしなかったが、みなが動搖するので、学校の片付けは中止となり、自宅へ帰らされた。警防団の団長だった父が、団員を引き連れて広島のほうへ向かっていった。しかし、広島市内には到底入れる様子ではなかったという。警防団たちは広島の方から呉の方面への帰宅者たちをトラックに乗せた。広島からの帰宅者たちは、皆どこかに怪我を負ったり、ガラスが刺さったりしている人たちだったという。その後も広島市で救護活動をおこなった父は、1945年10月ごろから貧血を起こすようになった。終戦から4年後、父の体には紫色の斑点や、小豆のようなイボができるようになった。父が原爆症の認定手帳を受けたのは、終戦から10年後のことであった。

032 私の人生読本

【ファイル名】HTC_032_wav01、HTC_032_wav02

【ホストスピーカー】大巴賢充ほか

【ゲストスピーカー】前山北海、名護思了、中本慶一、早島鏡正、莊保忠三郎

【言語】日本語

【放送日】1964年7月19日、7月26日、8月2日、8月9日、8月16日

HTC_032_wav01 【開始】00:00:00 【終了】01:12:10

HTC_032_wav02 【開始】00:00:11 【終了】01:00:12

HTC_031_wav01 【00:00:00～00:22:29】前山北海

前山北海をゲストに迎え、聞き手は大巴賢充である。前山は1910年、12歳のときにハワイへ渡った。新潟の大火で焼け出され、養育してくれていた祖父母が亡くなつたため、ハワイ島ニノレイのハカラウ耕地で働いていた父親の呼び寄せでハワイへ来た。商店にスクールボーイとして入り、ユニオンスクールに通いながら店の手伝いをした。1920年に父親が亡くなり、ビジネスマンなどを経て新聞記者となつた。大久保清らと一緒に新聞を作つてゐたが、意見が合わなくなつた1932年、山本常一を社長として大正印刷からカラーの朝刊を出すことになつたため、面白そうだとオアフ島に渡つた。

HTC_031_wav01 【00:22:43～00:46:31】名護思了

名護思了をゲストに迎える。聞き手は大巴賢充。名護は1907年12月6日にオアフ島へ上陸した。そのとき、カカアコに浄土宗のお寺があつたので、そこで正月をこし、翌年1月20日にホノルル日本語学校の校長として就任した。その後は、ハマクアを山のほうへ登つた先にあるアフアロアのヤマト宅の一室を借り、ヤマト学校という日曜学校を作つた。名護は車がなかつたときは、馬でキャンプの奥地にまで布教を行つてゐた。

HTC_031_wav01 【00:46:38～1:12:10】中本慶一

「カリヒの重鎮」である中本慶一をゲストに迎える。聞き手は大巴賢充。8歳か9歳ごろハワイへ渡つた。父親がパイナップルビジネスの熱に浮かされ、ビジネスを始めた。パイナップルで財をなした人はいない。1907年にホノルルへ出てきた。その後、1910年ごろから領事館にスクールボーイとして出入りした。中本は小さい頃から体が弱く、大きな手術を二度ほど受けている。

HTC_031_wav02 【00:00:11～00:25:05】早島鏡正

東京大学助教授の早島鏡正をゲストに迎える。聞き手は大巴賢充。哲学者会議の一員とし

てハワイを訪れている。早島は2年間セイロン大学に留学していた。セイロンは紅茶の名産地だが、高度によってお茶の味が違う。スワラエリアと呼ばれる寒い高所でできるお茶がとてもいい。セイロンは、面積としては北海道くらいで、人口は900万人ぐらいである。とても親日的な国である。仏教の国であり、釈迦の教え通りとても歓迎してくれる。

HTC_031_wav02 【00:25:09～1:00:12】 荘保忠三郎

獣医学博士の莊保忠三郎をゲストに迎える。聞き手は大巴賢充。ハワイ大学で動物の病理学を研究している研究者。北海道大学在籍中 21歳のころ兵隊検査を受けると第二乙となり、ドイツとスイスに滞在した。ヒトラーが幅をきかせる前であった。帰国後、獣医学を学んだ。戦後、コロンボ・プランのエキスパートとして日本政府からセイロンへ1年送られ、帰国後、アフリカのスーダンへ渡り4年大学に滞在した。

033 私の人生読本

【ファイル名】HTC_033_wav01、HTC_033_wav02

【ホストスピーカー】大巴賢充ほか

【ゲストスピーカー】森田利明、吉田のぶじ、まねき（松木開教師）、田村すなお夫人、レイモンド瀬長、重永茂夫

【言語】日本語

【放送日】7月11日、6月27日、7月4日、6月6日、7月18日、7月25日

HTC_033_wav01 【開始】00:00:00 【終了】01:12:10

HTC_033_wav02 【開始】00:00:11 【終了】01:00:12

HTC_033_wav01 【00:00:00～00:23:41】 森田利明

ハワイ報知の森田利明と翻訳談義をする。聞き手は大巴賢充。森田はハワイ生まれ。2歳で日本へ帰り、上海の東亜同文書院大学の商科出身。大学には満鉄の留学生のほか、私費の留学生、「支那人」の学生もいた。戦争中英語の雑誌、小説を読んで英語を学んだ。英語を日本語にすることはできるが、日本語を英語にすることはできない。翻訳については原文の雰囲気をつかむことが大切。読み言葉と書き言葉は異なる。

HTC_033_wav01 【00:23:49～00:42:50】 吉田のぶじ

西洋画家の吉田のぶじをゲストに迎える。聞き手は大巴賢充。吉田は16歳でハワイへ渡った。奨学金を得てボストンに4年滞在し、絵を勉強した。後にドイツミュンヘンでも学んだ。今は絵から離れて新聞社にいる。二世三世は弁護士や医者を目指していたが、今ではレベルの高い画家もいる。ハワイを飛び出て活躍している。文学をやる人はまだ少ない。日系人のソーシャルセキュリティー（社会保障）の相談を受ける活動をし、表彰を受けた。世界中を旅したが、今後は南米を旅してみたい。

HTC_033_wav01 【00:42:54～01:04:29】 まねき（表題には松木開教師とある）

本願寺ミッションスクールの校長であるまねきをゲストに迎える。聞き手は大巴賢充。まねきはハワイ大学に1927～1935年まで務めた。ハワイ島ヒロのパウカ出身で、中学からホノルルの寄宿舎に入った。1922年ハワイ大学卒業。農地試験場、プランテーション試験場、農業管理者を養成する場などで働いた。まねきは、サンデースクールや家庭説教で本願寺の話を聞き、テラモト先生の人格に魅了され、1945年にコナへ出張したときに宗教の道を志した。その後、京都の佛教中央学院で勉強した。話中で録音が切れる。

HTC_033_wav02 【00:00:00～00:26:36】 田村すなお

ゲストの田村すなおは田村牧師の未亡人で、音楽の先生である。聞き手は大巴賢充。1915

年にサンフランシスコへ行き、サリナスで田村と結婚した。すなおは京都の第一女学校、音楽学校を卒業した。今ハワイで音楽を学ぶ人は一生懸命ではないとすなおは考えている。かつては一日に13時間ピアノを練習した。娘にもピアノを教え、夫も音楽が好きだった。音楽学校を出て音楽の道に進んだ人は少ない。音楽は進んでいくものであり、常に芸に努めなければやっていけない。

HTC_033_wav02 【00:26:40～00:48:02】レイモンド瀬長

レイモンド瀬長をゲストに迎え、コインや貨幣の収集について話を聞く。聞き手は大庭賢充。瀬長は1930年代から収集を始めた。コインや貨幣は次第に価値が上がりもうかるのを知って集めようと思った。コレクションは他の人と交換しながら増やしていく。ホノルルにもコインの店やクラブがある。眺める楽しみと、もうけが出る楽しみがある。戦時にハワイで発行された紙幣も3～4倍の価値がある。ハワイの王朝時代のお金も高価である。ダブルプリントなどの出来損ないも値打ちがある。

HTC_033_wav02 【00:48:06～01:04:20】重永茂夫

重永茂夫をゲストに迎え、相撲談義を行う。聞き手は大庭賢充。重永が相撲に興味を持ち始めたのは地方巡業を見た11、12歳のころである。ハワイで宮相撲をやったことを覚えている。重永はマウイのジェシー（高見山大五郎）がいちばん強いと思っている。相撲は伝統的であるので近代化を目指さなくてよい。相撲界においての師弟関係は厳しく、仁義に外れたことはしない。話中で音量が下がり切れる。

034 この人と15分

【ファイル名】HTC_034_wav01、HTC_034_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】宮武睦夫、三上真一郎、高橋敬緯子、アカサカ・ツネオ、ハトリ・ロクゾー、松尾和子、馬遲伯昌

【言語】日本語

【放送日】1965年3月25日、5月6日、6月1日、6月3日、6月15日、6月6日、8月3日

HTC_034_wav01 【開始】00:00:00 【終了】01:04:39

HTC_034_wav02 【開始】00:00:11 【終了】00:59:10

HTC_034_wav01 【00:00:22～00:20:00】宮武睦夫

愛媛大学農学部昆虫学研究室、ビショップ博物館昆虫部研究員としてハワイに来ている宮武睦夫をゲストに迎える。聞き手は女性。宮武はてんとう虫を研究している。幼い頃からチヨウなどのきれいな虫を集めるのが好きだった。てんとう虫は世界中で「神様の虫」という意味をもつさまざま言葉が当てられている。

HTC_034_wav01 【00:20:00～00:41:17】三上真一郎

俳優の三上真一郎をゲストに迎える。聞き手は女性。松竹祭りでハワイを訪れている。三上は5人兄弟の4番目である。5人のうち4人は上海で生まれた。長門裕之や三国連太郎のような芝居をやりたいと語っている。

HTC_034_wav01 【00:41:21～00:52:59】高橋（ツジ）敬緯子

ミスユニバース5位であった高橋（ツジ）敬緯子と電話で対談する。聞き手は女性。高橋は三井物産に勤める夫の転勤について、現在アメリカのニューヨークに住んでいる。10年ほど前に出場したミスユニバースについて語っている。

HTC_034_wav01 【00:43:04～01:04:39】アカサカ・ツネオ

株式会社鎌倉書房販売部次長であるアカサカ・ツネオをゲストに招く。聞き手は女性。産経新聞社の企画で海外資料調査としてグループで視察にきた。サンフランシスコ、ニューヨーク、ワシントン、メキシコ、ロサンゼルス、ハワイと移動してきた。日本ではドレスメーカーの学校もあり、ドレメが盛んである。

HTC_034_wav02 【00:00:07～00:04:17】アカサカ・ツネオ

続き。ハワイでもドレスメイキングの海外版を販売したい。

HTC_034_wav02 【00:04:30～00:25:14】ハトリ・ロクゾー

不二家の技術指導者、ハトリ・ロクゾーをゲストに迎える。ハトリは東京で販売している菓子の技術を教えに来た。東京では月餅やカステラなどよく売れるものを作っている。菓子作りにも技術習得には 10 年ほどかかる。東京には、東京和菓子研究会、全国菓子技術審議会というものがある。ハトリは、そういう大会に飾り菓子を出品し、8 から 9 回ほど入賞している。

HTC_034_wav02 【00:25:25～00:39:34】松尾和子

歌手の松尾和子をゲストに迎える。松尾はハワイ・ホノルルの日本劇場で、歌謡ショーを行う。いつもはナイトクラブで歌っているが、最近はお座敷小唄も歌っている。替え歌のしやすい歌なので、ハワイの観客からも替え歌の歌詞を募り、それを日本劇場で披露する予定だという。

HTC_034_wav02 【00:39:40～00:59:10】馬遲伯昌

ゲストの馬遲伯昌は中国料理の大家として日本で知られている。3ヶ月間アメリカ本土を回って、日本に帰る途中でハワイに立ち寄っている。ロサンゼルスに 1 人、またアリゾナ大学に 1 人在学中の子どもがいる。一年前の夏にはスイスの大学を卒業した娘とニューヨークで合流し、一緒にハワイを通り日本へ帰った。

035 AJA Speaks

【ファイル名】HTC_035_wav01

【ホストスピーカー】Vernon Saiki

【ゲストスピーカー】ハツコ・カワハラ、ダグラス・ヤマムラ、タカオ・ヤマウチ、ダニエル・ノダ

【言語】英語

【放送日】不明

【開始】00:00:00

【終了】00:41:42

二世による、ハワイの政治、経済、社会、教育についての考えを論じるパネルディスカッションの番組。日系人コミュニティに対して情報や娛樂を提供することを目的とする。コミュニティの問題に批判的に取り組むことを推進するために、リスナーからの提案、批判を受ける。ゲストはドール中学校教諭のハツコ・カワハラ博士、ハワイ大学社会学部准教授ダグラス・ヤマムラ博士、保険カウンセラーのタカオ・ヤマウチ、公教育局中等教育課副課長ダニエル・ノダ博士。今回のテーマは、適応過程（文化変容過程）の二世にとっての問題と代償について。一世、二世、三世の間の文化の変容について考える。

経済的、社会的状況の変化や、他のエスニックグループにいかに扱われているかによって、文化変容の影響は異なってくる。一世の人口が減り、二世が年をとり、三世が大学生になり、四世が生まれ始めている。二世と三世の間には緊張感や隔たりがある。二世として、高校や大学で学んでいたとき、多くの友人が「オリエンタル」、日系アメリカ人、二世に対する差別について話し合った。1937年から大学で学び、第二次世界大戦を経て、自分が差別される対象だと感じた。三世や四世は二世と同じようには感じないだろう。早いうちに二世、三世、そして日系アメリカ人というアイデンティティはなくなり、アメリカ人というアイデンティティだけを感じるようになるだろう。

二世だけの特徴ではなく、日系人コミュニティの特徴として、差別感情などについて語るとき、しばしば「守りのメカニズム」が働いている。自分たちの思い通りに周りが行動しないことに対して自分たちを正当化しようとするが、グループ内にも差別は存在している。「カウンター差別」と呼ぶべきもので、二世の影響力が大きくなつて差別する側に立っても差別される側にいると認識している。アメリカ本土の人のなかに、ハワイに来たいというイタリア系の人などがいるが、彼らは（日系人が影響力を持っているため？）ハワイに受け入れられないのではないかと考えている。このことは、自分たちは完全に社会に統合されるべきか（日系性をなくすべきか？）という問いに通じている。

二世は自分たちの考えをはっきりと表明することはできなかった。三世は、そうではない。

経済的発展によって、積極的に行動するようになるのではないか。学歴が上がることによって社会への統合が達せられるのかについては疑問がある。個人がイエスとノーをしっかりと持たなくてはいけない。

西洋キリスト教は日系人コミュニティに影響を与えるか。善惡の判断に影響を与えてい るだろう。仏教も同様に、二世三世の親孝行などの概念に影響を与えている。しかし世代が下れば、今の若い世代は親孝行が何のことか分からぬ人もいる。若い人々はカリフォルニアに行きたがり、自分の成功を優先している。どちらが良いか悪いかは言えない。

非日系との結婚について。一世の考えも変わってきていて、白人の義理の息子のほうをかわいがり、親の世話をするのは（息子ではなく）娘の役目だとは思わなくなっている。

036 「何でも聞いてやろう」

【ファイル名】HTC_036_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】篠遠喜彦

【言語】日本語

【放送日】年不明 7月 14 日

【開始】00:00:00

【終了】00:31:37

ビショップ博物館は 1950 年からハワイで発掘し考古学をおこなってきた。ハワイの先史時代についておおよその目安が付いた。しかし、いつ、どんな人たちがハワイに入ってきたかを知る必要があり、そのためにはハワイ以外を調べなければならない。物質文化、社会を調べると、故郷はタヒチやニュージーランドではないかと思われ、1960 年からタヒチの先史文化を調べ、ハワイとのつながりを調べることになった。アメリカ国立科学財団(National Science Foundation) から 3 年分の調査費が下りて、今年から調査を始めた。タヒチやサモアの発掘をおこなっている。

タヒチには現在 3 万 5000 人おり、半数がフランス系との混血、15% が「シナ人」との混血である。チャプスイもある。タヒチ語とフランス語のラジオ放送がある。パリからの中継もある。田舎のお年寄りはフランス語を理解するのは難しい。

放送日は 7 月 14 日で、フランス革命の記念日であるパリ祭 (Bastille Day) である。タヒチはフランスの領地なので、タヒチでも 1 週間ぶっ続けでお祭りをする。タヒチではヒナノというビールが飲まれている。通貨はパシフィックフランで、88 フランが 1 ドル程度である。労働者はパペーテの町がいちばん高く、一日 200~300 フランを稼ぐ。タヒチの腰を振る踊りは比較的新しく、1800 年代の終わりにシカゴで博覧会があったときに披露されたベリーダンスを取り入れたものである。これが今のタヒチアンダンスの特徴になっている。

どんな小さな村にも水道がある。タヒチの人たちは清潔で、毎日水浴する。調査をしていくと、珍しがって人々がついてくる。ポリネシアン・ホスピタリティというものがあり、どこへ行っても大歓迎を受ける。ごちそうもしてくれる。とっておきのごちそうということで、サーディンとコンビーフを朝昼晩とふるまわれて困った。タヒチの人々は生野菜を食べない。タロイモの葉を食べる。ハワイ語とタヒチ語は非常に近い。ハワイ語の K はタヒチ語の T の音になる。ハワイ語のカネ (Kāne, 男性) はタヒチ語のタネ (Tane) になる。英語などというタブー (Taboo) はハワイ語でカプ (Kapu)、タヒチ語でタプー (Tapu) となる。ハワイ語のハレ (Hale, 家) はファレ (Fale)、アロハ (Aloha) はアロファ (Alofa) となる。言葉だけでなく、文化も似ている。ハワイ人はタヒチあたりから来たのではないかと思い、

調査をしている。

タヒチの家庭にはキッチン、便所、スリーピングハウスなど5つの小屋が別々に建っている。日本人はタヒチ人から好意を持たれる。戦前マカテアという島ではリン鉱石が採れたので、日本人が多くそこへ行った。そこでタヒチ人は日本人に親切にしてもらい、日本のメカニクスの技術に驚いた。最近では遠洋航海の練習船が入ってくる。日本人はきれいな制服を着て礼儀正しく、船もきれいに磨かれているため、規律が正しいと思われている。

ハワイにある花は南米から入ってきたものがほとんどである。タヒチには花が少ない。タヒチでは階級によって使う言葉や名前が異なっていた。

037 Dick Gima Show

【ファイル名】HTC_037_wav01

【ホストスピーカー】Dick Gima

【ゲストスピーカー】I. George

【言語】日本語/英語

【放送日】1963年10月20日

【開始】00:00:00

【終了】01:02:24

【00:00:00～01:01:09】Dick Gima Show

毎週日曜日 6 時から放送している番組。カーネギーホールでの 2 日間の公演を終えた I. George こと石松讓治をゲストに迎えている。石松の二日間の公演は、カーネギーホールの収容 2750 人がほとんどいっぱいになった。カーネギーホールの前には、石松はロイヤルハイアーンホテルのホールで歌った。カーネギーホールのほうはアメリカの最高のバンドがいると楽しみにしていたが、バンドがそれほど大したことなくがっかりした。

番組中に流れる歌謡曲は以下の通り。

5:00～8:01 『今日我恋愛す』歌：水上清・柴田珠江

9:27～12:07 『東京ギター』歌：橋幸夫

14:02～17:46 『若いやつ』歌：橋幸夫

18:37～21:43 『えらぶ百合の花』歌：三界りえ子

22:09～25:06 『出世街道』歌：畠山みどり

26:50～29:54 『高校三年生』歌：舟木一夫

31:16～33:52 『ガラスのジョニー』歌：アイ・ジョージ

35:36～39:43 『伊豆の踊子』歌：吉永小百合

41:34～44:22 『若い東京の屋根の下』歌：橋幸夫・吉永小百合

45:48～48:42 『恋は神代の昔から』歌：畠山みどり

53:15～56:56 『島のブルース』歌：三沢あけみと和田弘とマヒナスターズ

57:21～01:00:12 『戦友』歌：アイ・ジョージ

【1:01:51～1:02:24】日曜日の午後 7 時のニュース（途中で切れる）

038 なんでも聞いてやろう

【ファイル名】HTC_038_wav01

【ホストスピーカー】大巴賢充

【ゲストスピーカー】西義雄、来馬道断、阿部竜伝、マタニ・ギカン

【言語】日本語

【放送日】年不明 11月 23日

【開始】00:00:00

【終了】01:02:24

仏教東伝 70 年記念会に参加するメンバー、西義雄（東洋大学文学部長）、来馬道断（曹洞宗宗務総長）、阿部竜伝（文部省宗教法人審議委員）、マタニ・ギカン（日本短波放送番組審議会事務局長）をゲストに迎える。聞き手は大巴賢充。メンバーはニューヨークで行われる 70 年記念式典に行く中継地点としてホノルルを訪れた。ハワイへの日本からの仏教伝来は 70 年よりも前のことであるが、アメリカ本土に仏教が伝わったのは 70 年目である。正式に日本の仏教がアメリカに紹介されたのは、明治 26 年にシカゴで行われた万国宗教会議とされており、この年から 70 年目になることを記念している。この記念式典を行う組織は、鈴木大拙を会長とするものである。

039 Social Function of the "Hawaii State Society"¹

【ファイル名】HTC_039_wav01、HTC_039_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】不明

【言語】英語

【放送日】1965年6月29日

HTC_039_wav01 【開始】00:00:26 【終了】01:28:30

HTC_039_wav02 【開始】00:00:21 【終了】00:27:30

HTC_039_wav01【1:00:59～】

ハワイの音楽とダンスを紹介する番組。ウクレレやハワイ語の歌。フラも紹介されていることから、ステージ会場の録音と思われる。ハワイ語の歌の合間に、歌詞の英訳や歌の解説がされる。解説では、ハワイ王国の歴史が説明される。“E Hawai‘i (Hawai‘i Aloha)”、“A Song of Old Hawaii”、“Henehene Kou ‘Aka”、“Nā Ali‘i (Hail to the Chief)”、“I wanna go back to my little grass shack”、“Anapau la”、“Aloha oe”などのほか、ハワイのウェディングソング、タヒチの音楽が紹介される。

HTC_039_wav01【1:01:08～1:28:30】

スwinging jazzのバンド演奏録音。

HTC_039_wav02【00:00:21～00:27:30】

スwinging jazzのバンド演奏録音。

¹ Hawaii State Society of Washington DC の公式 HP.

(<https://hawaiistatesociety.wildapricot.org/>)

040 LBJ's Speech: Vietnam - Stop bombing

【ファイル名】HTC_040_wav01

【ホストスピーカー】Lyndon B. Johnson

【ゲストスピーカー】

【言語】英語

【放送日】1968年3月31日

【開始】00:00:00

【終了】00:32:28

第36代アメリカ合衆国大統領リンドン・ジョンソン（Lyndon B. Johnson）によるベトナム戦争終結についてのスピーチ。

041 ロム〇〇¹労働組合代表インタビュー、話の泉

【ファイル名】HTC_041_wav01、HTC_041_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】不明

【言語】日本語

【放送日】1951年4月10日

HTC_041_wav01 【開始】00:00:15 【終了】00:08:35

HTC_041_wav02 【開始】00:00:15 【終了】00:08:35

アメリカの宗教についてのインタビュー。日本にも宗教はあるが、盆など行事のときに墓参りをするだけである。アメリカでは毎週日曜に教会へ行く。日本には「罪」の観念がない。「恥ずかしい」という観念はある。罪はキリスト教の特徴である。

アメリカの資本主義は変化してきている。自分がもうけたのは社会のおかげだという気持ちがある。もうけた分を社会事業に投資していく生き方が顕著であると考え、研究費などに寄付している。ハーバードやスタンフォードなどの大学は広い土地を有している。それを利用して利益を生み出している。研究者は特許を取り、そこから生まれたお金を学校に寄付し、その寄付で新たな発明が生まれる。日本の大学は研究費が足りず困っている。アメリカでは日本ブームが起こっている。日本を離れると日本の良さが分かる。東洋的なものがアメリカによく入ってきている。

¹ 判読不明

047 オライリーさんありがとう

【ファイル名】HTC_047_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】不明

【言語】日本語

【放送日】1962年

【開始】00:00:13

【終了】00:28:51

【00:00:13～00:25:00】オーライリーさんありがとう

20年軍に勤めたオライリー（Hugh O'Reilly）の狼犬部隊の除隊に際し、「聖家族の家」¹にかかる活動を感謝する特別番組。オライリーに感謝を伝える子どもの合唱や、「さくらさくら」、「春」、聖家族の家出身の子どもからのメッセージ、フジテレビ国際部長ヨシムラ・カズオからの挨拶。

2年前、フジテレビジョンがオライリーと仲間を日本に呼び特別番組を放送した。1961年にフジテレビのテレビクルーがハワイに来て番組を放送した。ヨシムラから、戦争孤児を育てる「聖家族の家」に貢献したオライリーは、政治家、外交官よりも日本とアメリカのきずなに貢献した、とメッセージが送られた。「聖家族の家」出身の子どもからのメッセージでは、子どもらがハワイを訪問しオライリーと再会し、以降も交流が続いていることが分かる。子どもたちはオライリーと一緒に海で泳いだり、メリーゴーランドで遊んだりした。子どもたちは、オライリーが軍をやめることは寂しく、また会いたいと願っている。シスター、ジエネビー・マクブライド院長からのメッセージでは、1949年のクリスマスごろの思い出が語られる。当時、オライリーは毎日「聖家族の家」を訪ねてくれた。朝鮮戦争に向かう日まで、たった一日を除いて、毎日来てくれた。朝鮮にいるオライリーは子どもたちと手紙のやりとりをしていた。シスターは、狼犬部隊の厚意、オライリーのやさしさ、礼儀正しさ、実行力を忘れず、ユウコ夫人と家族の幸せを願う、とメッセージを終えた。狼犬部隊の隊員たちは、お小遣いを出し合って聖家族の家の子どもたちを支え、これまでに34万ドル献金した。これらは自由意志によるものであった。

¹ 聖家族の家のホームページ内に、狼犬部隊についてのページがある

(<https://seikazoku.com/story/>)。番組では、子どもたちがハワイを訪問したことが示唆されているが、HPには、子どもたちがハワイにホームステイするとの記載がある。

【00:25:00～00:28:51】放送劇「いしかわれんさく、ゆみこの婚約」
ラジオドラマ。長浜藤夫、加藤玉枝、里見京子、川久保潔が出演。

062 大巴先生

【ファイル名】HTC_062_wav01、HTC_062_wav02、HTC_062_wav03、
HTC_062_wav04

【ホストスピーカー】 大巴賢充

【ゲストスピーカー】 N/A

【言語】 日本語

【放送日】 不明

HTC_062_wav01 【開始】 00:00:13 【終了】 01:05:25

HTC_062_wav02 【開始】 00:00:38 【終了】 01:30:58

HTC_062_wav03 【開始】 00:00:22 【終了】 00:28:20

HTC_062_wav04 【開始】 00:00:33 【終了】 01:05:33

HTC_062_wav01 大巴賢充による上方かるたの解説。

【00:13～27:05】 「触らぬかみに祟り無し」、「亭主の好きな赤鳥帽子」、「天道人を殺さず」、「頭隠して尻隠さず」、「阿呆につける薬はない」、「三遍まわって煙草にしよ」

【27:06～32:07】 「触らぬかみに祟り無し」繰り返し

【32:12～59:26】 「聞いて極楽、見て地獄」、「義理とふんどしあはかされぬ」、「油断大敵」、「幽霊の浜風」、「目の上の瘤」

【59:55～1:05:25】 「めくらの垣覗き」、「身から出た鎌」（途中で切れる）

HTC_062_wav02 音楽

【00:38～1:02:42】 ハワイアンミュージック

【1:02:54～1:30:58】 スwing音楽

HTC_062_wav03 スwing音楽

HTC_062_wav04 大巴賢充による上方かるたの解説。

【00:33～42:12】 「待てば海路に日和あり」、「芸は身を助ける」、「下戸のたてた蔵はない」、「文は遣りたし書く手は持たん」、「武士は食わねど高楊枝」、「子は三界の首つかせ」、「得手に帆を揚げ」、「縁の下の力持ち」、「閻魔の色事」

【42:24～1:04:38】 「亭主の好きな赤鳥帽子」、「天道人を殺さず」、「頭隠して尻隠さず」、「阿呆につける薬はない」、「三遍回って煙草にしよ」繰り返し

063 アメリカの声 (Voice of America)

【ファイル名】HTC_063_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】マツモト・カズオ、ツカダ・イサオ、サントキ・ゲンジ

【言語】日本語

【放送日】1958年5月29日

【開始】00:00:05

【終了】00:29:06

【00:05~23:02】ハワイだより第2回

先週は、ハワイを訪れ、ハワイのあらましを放送したので、今回はハワイ最大の産業である砂糖生産について伝える。一年の平均気温が33度のハワイでは、どの島でもサトウキビが育っている。年産100万トン以上、年収は1億5000万ドルと、ハワイ経済の中心となっている。1万7000人が砂糖農園、製糖工場等で働いている。ハワイ産の砂糖はアメリカ本土に送られ、アメリカの全消費量の一割強となっている。アメリカ本土では、サトウダイコンの生産が盛んなことや、キューバからの砂糖の輸入もある。アメリカの連邦砂糖法という法律では、砂糖生産の割当が規定されている。ハワイ生産の砂糖はアメリカ本土の消費量として105万2000トン、ハワイ内の消費として5万トンという制限が付けられている。ハワイ七島には30近く砂糖農園があり、労働者は1時間最低1ドル25セントの給料を与えられ、約5万の家族を扶養している。この給料は、アメリカ本土やプエルトリコの砂糖農園の労働者より良い。明治33年創立、ハワイ第三の大きさであるオアフ島北岸のワイアルア農耕会社の事務所を訪問し36年勤続のマツモト・カズオ人事課長、帳簿係のツカダ・イサオ、業務部長兼渉外部長のサントキ・ゲンジ、日本語の上手な3人の二世から話を聞く。3人も日本に行ったことはない。

マツモトの両親は熊本と山口出身で、サントキの両親も山口出身である。ワイアルア農耕会社の従業員は現在800人である。そのうち日系人は半数以下で、「比島人」(フィリピン人)がいちばん多い。機械化によって従業員の人数が減っている。高校を卒業した二世は、地域の外にあるいい仕事のほうへ行く。収穫は畑を焼いて行う。葉だけ焼き、ブルドーザーでサトウキビを一か所に集める。集めたサトウキビ40~45トンを積み上げ、ミルに送り、絞る。色が付いたままアメリカ本土の製糖会社に砂糖を送り、そこで白くする。黒砂糖を洗って炊くことを繰り返すと白くなる。ハワイでは白人も味噌汁、ごはんを食べる。病気をした場合、仕事をしなくても1年に48日間は給料をそのままもらえる(有給休暇)。休暇も2~3週間ある。引退は65歳で、月給の3%を積み立て、恩給(退職金)、保険をもらえる。引退後は日本へ帰る人もいる。紀元節には人種に関係なく会社全体が休業ということもある。

った。将棋、碁、野球、テニスなどの娯楽がある。日本映画も人気があり、白人も観に行く。

サントキの仕事は、会社の政策決定、実施、労働組合との契約実行、労使関係の調整、賃金決定、事故予防、雇用者の養成、待遇改善、機関誌の発行をおこなうことである。昨年、会社は約6万トンの砂糖を生産した。生産量は気候やサトウキビの状態によって変わる。8トンから1トンの砂糖が取れればよい方である。ハワイの総収入の20%が砂糖から生み出されている。来週は、ハワイのパイナップル産業について伝える。

【23:02～29:06】ガンと心臓病のための研究の国際協力計画について

医学の進歩によって伝染病など他の病気が減り、ガンと心臓病が増えている。アメリカでは、病死者の半数が心臓病で、1955年は80万人の死者があった。アイゼンハワー大統領は、国際協力、ソビエトと協力した医学研究の必要を強調した。WHOの指導で、科学の平和利用としてのガン研究が提唱された。

064 Mr. Simmons - U.S. Reconstruction Lecture

【ファイル名】HTC_064_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】Mr. Simmons?

【言語】英語

【放送日】不明

【開始】00:00:08

【終了】00:19:55

ミシシッピ州ジャクソン在住市民、シモンズ氏による合衆国での黒人公民権運動に関する意見表明。

065 Dr. Shinoto Interview

【ファイル名】HTC_065_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】篠遠喜人、篠遠喜彦・和子夫妻

【言語】日本語

【放送日】1958年8月2日

【開始】00:00:07

【終了】00:25:52

カナダのモントリオールで第10回国際遺伝学会がおこなわれる。世界中から参加者が集まり、日本からは木原均はじめ、アメリカに留学している日本人も参加する。日本からは小麦の遺伝学、品種改良の問題、動物や植物の細胞学的方面の人が参加する。展示では日本の材料、蚕や金魚、朝顔、オナガドリなどの実物を見せる。日本の遺伝学の先駆者は外山亀太郎で、蚕の専門家だった。メンデルの遺伝法則を用い、実験をした。蚕の雑種を作り上げ、今でもそれが使われている。

広島や長崎における植物や人間に対する核武器の影響について。遺伝学者は放射線の遺伝的な影響に关心がある。ジュネーブやニューヨークで放射線の国際会議がおこなわれている。放射線の量が少なくとも遺伝的影響がある。

アメリカ南部では輸血と人種について、輸血をする際に人種も明記しなければいけないことが問題となっている。遺伝学上人種と血液型の関係について。血液型は遺伝するが、人種によって違いが出るということは言えない。日本人の祖先については、大野晋の岩波新書『日本語の起源』が注目されている。考古学者も日本人の起源を研究しており、まだ分かっていないが、少しずつ進んでいる。

日本人は戦後進駐軍の影響を受け、外国人と接する機会が増えている。進駐軍にかかるることはヘボン式で表記する決まりがあったが、一般的に使用されるようになった。髪、肌、目の色、髪の縮れなどは遺伝によって決まる。しかし現代においては、髪質を人工的な技術を持って一時的に変えることができる。日本人は直毛が多いが、わざとウェーブをかけている。筆跡も遺伝すると言われている。優れた遺伝子が天才として出ることはあるが、それは親や家庭の教育などの環境が良い遺伝子を盛り立てて現れる。

道徳教育、昔の修身教育が復活しているが、やり方によっては危険を伴うので気を付けなければいけない。ハワイ大学新総長スナイダー博士は、人間の遺伝学で有名である。面会し、日本の遺伝学会について話をした。戦後日本の教育は変わり、アメリカ式の良い市民を作る方向になっている。教育者はまだそれに慣れていない。科学における学生の人数は少ない。文部省は科学教育を振興する政策を進めている。

066 KZOO のど自慢

【ファイル名】HTC_066_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】不明

【言語】日本語

【放送日】3月15日、3月22日

【開始】00:00:16

【終了】01:04:44

オアフ島の様々な地域からホノルルの野外スタジオに市民が集まり KZOO 素人のど自慢大会を行っている。日本の歌や日系人の歌が披露されている。

067 ニューズ展望 山河あり

【ファイル名】HTC_067_wav01

【ホストスピーカー】マサト・マツモト

【ゲストスピーカー】不明

【言語】日本語

【放送日】不明

【開始】00:00:28

【終了】00:28:53

日本劇場で上映中の問題作「山河あり」は、政治論にもなっており、ハワイで大きな話題を呼んでいる。問題になっている「山河あり」の議論をもとにして、9年間の日本の軍人生活について振り返りながら話をする。松山善三は「山河あり」で、戦後17年たち戦争犯罪を大きなテーマとして取り上げ、戦前のささやかな幸せが戦争で無残に散った姿をドラマのタッチで描いた。働く世代と若い世代の戦争に対する意見の対立が深刻になっており、映画の反響に影響を与えている。松山監督は冷戦に対する無言の抵抗を表現している。映画の印象は見る人の立場によって異なる。戦争の開始については様々な意見がある。予期せぬ戦争、強制、大義名分のための戦争があるが、いずれも勝つという前提のもとにおこなわれる。勝つためにはいろいろな手段が取られ、無理が伴う。この生じた無理を人道上の問題として取り扱うのが「山河あり」である。

1939年、大学を卒業した年に26歳で、二重国籍を持ったまま第一乙種で合格、郷里熊本の第六師団に入営した。乙種だからと安心していたが、乙種も甲種に編入されることを聞き、「はっ」としたマツモトは全ての希望を失った。資格があるのに幹部候補生に志願しないのは非国民甚だしいと言われ志願した。どれだけ努力しても認められないのが当時の初年兵であった。乗馬訓練がいちばん辛かった。軍隊生活から抜け出すために自殺する兵隊もいた。絶対服従であった。

「山河あり」は戦争反対の意図で作られ戦争忌避の取材が過大であった。アメリカはジョンストン島での水素爆弾の核爆発実験をおこなうというが、これも困ったことである。

別の番組。舞台装置や芸術について。日本人婦人はなで肩が多く、美しいと言われていたが、なかには肩の張りを見せるためにドレスに肩当てをしのばせている。今頃の男女同権指向は肩の形にも及び、肩を並べるようになってきたかもしれない。なで肩が美しいと言ったら男尊女卑、封建主義思想になると言う人もいる。同じ月を見てもそれぞれ違った感想を持つ。

ハワイを題材にした映画「山河あり」の感想も、その人の持ち合わせる境遇や学識によって変わる。ある婦人は、戦争はいかに悲惨であるかを感じさせられ、日本生まれの親と、米

国市民である子どもの間に起こる無念の記憶（不明瞭）がよく表れていると語った。

魅力ある美しさは、正しい姿勢から生まれる。頭、肩、腰、くるぶしのつり合いがそれでいるかが重要で、顔が美しくても歓迎できない姿もある。手や足がどれほど美しくても、体全体の調和を保っていなければ美しいとは言えない。女性がいちばん美しいと言われるのは 16～18 歳ごろまでと言われている。両腕を広げた長さは身長と同じと言われているが、白人は身長より長く、日本人は身長より短いことがある。毛深い白人より、日本人の腕のほうが美しいという定評がある。以前は着物の下から隠れた足が、少し見えている様子が美しいとされたが、今では足をさらけ出すのがニュールックであると言われる。それを批判する人は封建的だとこき下ろされる。

S01 Military Officer's speech on Vietnam situation includes
speeches by Vietnamese top diplomats.

【ファイル名】HTC_S01_wav01、HTC_S01_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】グウェン・カオ・キ

【言語】英語

【放送日】不明

HTC_S01_wav01 【開始】00:00:11 【終了】00:32:37

HTC_S01_wav02 【開始】00:00:10 【終了】00:32:33

1966年1月15日陸軍議会（Armed force congress）におけるベトナム共和国首相グエン・カオ・キ（Prime Minister Ky）のスピーチ。グエン・ドゥック・タン将軍（General Nguyen Duc Thang）のスピーチと質疑応答。ベトナムのゲリラやテロリストなどの状況を説明し、アメリカ軍とともに戦争に勝つ方法を考えたいと話している。話中で切れる。

S02 20th Century Nisei the Pride & the Shame

【ファイル名】HTC_S02_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】不明

【言語】英語

【放送日】1965年2月6日

【開始】00:00:05

【終了】00:25:11

日系アメリカ人二世の第二次世界大戦の経験を振り返る番組。日本軍のパールハーバー攻撃があり、(アメリカ本土)西海岸の日系アメリカ人が強制収容された。収容された人の多くは日本を祖先に持つが、アメリカ生まれのアメリカ市民であった。

3人の二世が、パールハーバーが攻撃された日を振り返る。ある二世は、日曜日、教会に行く前朝食をとっていたとき、突然ラジオ放送で、攻撃のニュースを聞いた。ネブラスカにいた別の二世は、二世と市民権の重要性を話し合う集会をしていた。3人目の二世は、ニュースを聞いたとき、兄弟で顔を見合わせ、「問題が起った」と思った。

FBIは、日系人の危険とみなされるあらゆる人や、短波ラジオを所有する人、また、リーダーを取り締まった。ジョン・L・デウィットは“Jap is Jap”と発言した。強制収容のために手放した家や店はほとんど売れなかった。アメリカの敵国はドイツ・イタリア・日本であったが、日系だけがこのような経験をした。退去した日系人は、アセンブリーセンター(仮収容所)と呼ばれる陸上競技場や競馬場に集められた。家長が報告、登録をするとファミリーナンバーとタグが与えられ、持つべきものと持つべきでないものを指示された。移動の準備は3日間でおこなった。あるものは捨て、あるものは残し、そして仮収容所に持っていった。

日本の血を引くものは、アメリカ政府に反対し不忠誠な考えを持っているとされた。アメリカで罰を与えることができる人は行動に対してであり、考え方を罰することはできなかった。日系人の反政府的な企てや行動を誰も証明することはできなかった。それでも日系人の男性、女性、こどもが裁判もなく軍による身体的拘束を受けた。

収容所では、図書館やソフトボールなどのクラブ活動が作られた。アメリカの快進撃が発表されても、収容は続いた。収容所は砂漠などに建設された。収容所では英語を主に話す二世が前に立ち、当局との交渉をおこなった。戦前の二世は、最も教育を受けたマイノリティ集団であった。しかし大学を卒業しても就職はフルーツスタンドなどに限られた。二世の医師や看護師はキャンプで16-19ドルの給料を得た。

1943年になると、二世の徴兵が再開した。収容者の全員が忠誠登録をしたが、収容に反

対する多くの人が登録を拒否したり、アメリカ市民権を放棄したりした。それでも多数がアメリカ人であるという自らの考えを示した。こうして 442 部隊が結成され、忠誠心は血（血統）とは関係がないことを証明した。上院議員のダニエル・イノウエはイタリアで負傷し右腕を失った。イノウエは、ミシシッピで訓練中、上官に「日系人は白人と同じように白人用の映画館の入り口を使うように」と言わされた。“colored”的レストランなどには行かないよう言われた。サレルノに上陸後、日系人はすぐにその高い能力を示した。やがて日系人の強制収容は解かれ再定住するようになった。日系人はリトル・トーキョーを離れ、シカゴや中西部を目指した。ヨーロッパ戦線では、442 部隊が「テキサス大隊」を救出した。ハワイへの船をカリフォルニアで待つイノウエは床屋へ行き、「祖父母はどこから来たのか」と聞かれ、「日本だ」と答えると、「ジャップの髪は切らない」と言われた。

S03 Japan-American Friendship Interview

何でも聞いてやろう

【ファイル名】HTC_S03_wav01、HTC_S03_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】タケイチ、ヤマモトキヨツグ

【言語】日本語

【放送日】不明

HTC_S03_wav01 【開始】00:00:10 【終了】00:31:15

HTC_S03_wav02 【開始】00:00:27 【終了】00:30:57

HTC_S03_wav01 【00:10～30:34】座談会

日本からの新聞記者タケイチをゲストスピーカーに招いて、戦後の日本の現状について語っている。李承晩ライン以降の日本の朝鮮人の立場や、平成天皇と美智子皇后殿下の御成婚、それに伴うテレビ放映について話している。

ハワイはどんな肌の色の人でも、同じように車を購入し街を走り生活している。このような場所は世界に他ない。日本も1日何百円という生活費のレベルに経済を上げていかなくてはいけない。マーシャルプランもいいが、アメリカ合衆国政府はこのハワイという場所に国際大学を作り、更にこの人種・民族を超えた生活レベルの高さを広げていくべきだと語る。

HTC_S03_wav01 【00:27～30:57】何でも聞いてやろう

日本からきたヤマモトキヨツグ（北陸放送専務）をゲストに迎える。聞き手は不明。ハワイでは桜まつりが開催されており、日本からは松竹歌劇団が来ている。日本からワシントンに降り立ってみると、満開の桜に迎えられた。日本の桜とは少し異なるようで感動した。敗戦後の日本は道徳が問題であるという。最近の若者は、新しい憲法をしっかりと読まず、自由と権利だけ主張し義務を果たさない傾向にあると語る。新聞のジャーナリストを経て、民間放送に関わる仕事を10年ほどやってきた。今日ではNHKだけでなく民間放送が増え、映画だけであったものが各家庭でラジオやテレビが普及してきた。（30:56まで）

S04 朝日新聞

【ファイル名】HTC_S04_wav01

【ホストスピーカー】フーバー立石、アラカキ

【ゲストスピーカー】朝日新聞社員

【言語】日本語

【放送日】不明

【開始】00:00:00

【終了】00:14:14

朝日新聞社員をゲストとして迎える。聞き手はフーバー立石と女性（アラカキ）。 「ラジオ放送が出てくると、新聞は売れなくなる」と言っていたが、そんなことはなかったという。確かにラジオは普及したが、耳で聞いたニュースを目で読んで確かめたいという人が多いようで新聞も売れている。近頃では娯楽の面がよく読まれるようになり、ハワイの新聞でも社説が姿を消した。社説を読んでいるかどうかという日本の世論調査もあるが、見栄を張るために「社説を読んでいる」と答える人が多いので、あてにならないという。

皇太子と美智子様の成婚の際には、報道についていろいろな工夫がなされた。天皇の地位が変わったので、大正天皇の結婚の際に使っていた仰々しい言葉などは使えない／使わない方針で、と話が進んだ結果、シンプルな見出しつけることになった。

ハワイがアメリカの州になり、日系二世の国会議員（ダニエル・イノウエ）が誕生した。その際には日本の各紙がこぞって報道したという。

S05 話の散歩道

【ファイル名】HTC_S05_wav01

【ホストスピーカー】フーバー立石

【ゲストスピーカー】牧田

【言語】日本語

【放送日】年不明 7月 27 日

【開始】00:00:20

【終了】00:15:13

フジテレビ牧田をゲストに迎える。民放のテレビ局が増えた華やかな世界の端には、今でも苦しい思いをしている戦争未亡人がある。牧田の旧友の未亡人も、北海道から東京に出てきてもなかなか仕事が見つからず大変であった。ある日、彼女は大衆食堂を始めたいと言い出した。牧田はその相談に対して、彼女がカフェーやキャバレーに勤めて独立したらどうだと思い、まず妻に提案した。そうすると妻は彼女を女給にさせるのはかわいそうだと言った。他の人にも、彼女の子供の教育も考えるとカフェーやキャバレーに勤めさせるのは良くないと反対された。しかし牧田はそう反対する人たちに、彼女をカフェーやキャバレーで働くかなくてもいいくらいに援助することができるのかと問いたいという。結局彼女は考えて、銀座のキャバレーで働き始めた。彼女の子どもが先生に母親の職業を聞かれたとき、お母さんは銀座のキャバレーで働いている、先生もお金を貯めてぜひ遊びに行ってくださいと答えたそうだ。この話を彼女から聞いた牧田は、彼女の子どもが彼女の仕事をしっかりと理解していることに感動した。戦後のアメリカによる日本の民衆教育はちゃんと実を結んでいる。全学連で騒いでいる学生はほんの一部で、多くの学生はしっかりと時間をかけて相談し合って、物事を決めることができている。

S06 話の散歩道

【ファイル名】HTC_S06_wav01、HTC_S06_wav02

【ホストスピーカー】渡辺利男、大巴賢充、本田緑川、吉村清子

【ゲストスピーカー】N/A

【言語】日本語

【放送日】1962年12月6日、1963年9月26日、10月27日、11月4日

HTC_S06_wav01 【開始】00:00:20 【終了】00:15:13

HTC_S06_wav02 【開始】00:00:20 【終了】00:15:13

HTC_S06_wav01 【00:20～17:58】話の散歩道、渡辺利男 1962年12月6日

パールハーバー攻撃日の思い出。1941年12月7日日曜の朝。「国籍不明の飛行機がパールハーバーを爆撃している。日の丸が見える、日本機だ」というニュースが飛び込んだ。昨日の新聞では、アメリカの世論も戦争に反対していると報じられていた。新聞を信じていたから、外交交渉によって平和解決すると思っていた。防空演習か、あるいは戦争が始まったのか半信半疑であったが、気持ちが憂鬱になった。砲弾はマッカリーとキングの角にも落下した。その近所は火の海となり、第二弾の破片が近所の家のキッチンに飛び込み、日本婦人が即死した。マッカリーの被害が大きく、犠牲者はみな日本人であった。あのころ、「物資が豊富で人口の多いアメリカが勝つのではないか」と言うと、「日本人が何を言うか」と罵られ、後ろ指を指された。夜間外出禁止、灯火管制が指示された。

HTC_S06_wav01 【18:03～30:10】話の散歩道「狐の嫁入り」、大巴賢充 1963年9月26日

日が当たりながら雨が降ることを狐の嫁入りと言う。1931年8月7日、移民局を出て、ニシさんに連れられて小林ホテルに来た。昼間の強い日差しと赤い花が印象的であったが、そこに雨が降ってきた。ハワイに来たとたん、狐の嫁入りと出会った。ハワイの地名であるパパイコウと、ハワイで食卓に出たパパイヤを混同して、こんがらがってしまい、仕分が付くのに数年がかかった。パパイコウ行きの手紙に、「パパイヤ、ハワイ」と書いてしまった。狐の嫁入りの話は夜もある。『江戸人衆』のなかにある話では、宝暦3年8月、江戸市中で9つのころ（10時ごろ）、提灯や廟うちの女乗り物を前後数十人が守護して本田家の門を入っていった。結婚式の噂も聞いていないのにと怪しんでいると、翌々日あの晩本田家は嫁取りをしていなかったことが分かった。『会談老の杖』では、日暮れごろ商人が100を超える提灯の行列が通るのを見た。提灯の紋所はなかった。狐は狡猾に見えて人になじまない悪役であるが、狐の嫁入りを見ても人畜無害である。

HTC_S06_wav02 【00:00～11:50】話の散歩道、本田緑川 1963年10月27日

立石から、古い話をしてくれと言われた。1917年、ハワイ新報に採用されてから44年間
ペンにかじりついて生きてきた。ハワイ中学の先輩には州上院議員のノダ氏などがある。同
級生にはシティ銀行副頭取ムラタ、保険のオグチ、ムラシゲの諸氏がいる。後輩には弁護士
の築山長松、最高裁判事マルモト・マサジ、ハワイ銀行副頭取のヤマガタがいる。ハワイ新
報は朝刊のみであり、選挙の日などは夜遅くまで働いた。初任給は35ドルだった。新聞記者
は取材でも遊びでもホノルル電車にフリーで乗れた。巡回法廷の日本語通訳だったミキ
とドイルが思い出深い。

HTC_S06_wav02【11:54～24:14】話の散歩道、吉村清子 1963年11月4日

野球選手がバッターボックスに入る前の動作について、いろいろな形がある。KIKI放送
局のベースボールチームについて。タサカ、モリタ、オオシロなどのメンバーがそろった。
迷プレイヤーが集まっている。

どんな人間にも癖というものがある。「なくて七癖、あって四十八癖」ということわざにつ
いて考えた。7×7は48では計算が合わない。なぜ一つ少ないのであろうか。アラガキは
車を運転するときにぶつぶつ独り言を言う癖がある。

S07 親善使節 茅誠司

【ファイル名】HTC_S07_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】茅誠司

【言語】日本語

【放送日】不明

【開始】00:00:10

【終了】00:11:10

カイウラニホテルで開催された、会食・パーティーでの挨拶。

東京オリンピックが終わり、諸外国から日本人の気質を褒められたことがとても誇らしかった。ニューヨークタイムズでは、「日本で安全にお金を送るなら、封筒にお金を入れてタクシーに入れれば、タクシーの運転手がただで届けてくれる」とやや誇張気味に書いてあった。これは海外からの客に日本のタクシーが優しく接したことの現れだとうれしく思った。国際連合でのケネディ大統領の演説通り、平和とは条約や憲章によってではなく、人々の心の中に築くものである。

S08 インタビュー

【ファイル名】HTC_S08_wav01、HTC_S08_wav02、HTC_S08_wav03

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】山野愛子、長谷川、中曾根美樹

【言語】日本語

【放送日】1962年2月16日、3月29日、11月28日

HTC_S08_wav01 【開始】00:00:00 【終了】00:23:15

HTC_S08_wav02 【開始】00:00:07 【終了】00:36:32

HTC_S08_wav03 【開始】00:00:00 【終了】00:06:47

HTC_S08_wav01 【00:00～05:54】山野愛子

(話中から始まる) 昔は美容師が華美であれば、好まれなかった。しかし、今ではきれいにしている美容師では誰もお客様がつかない。

HTC_S08_wav01 【06:06～10:52】

学生の政治問題について。聞き手は男性。学生運動とは民主政治が安定していないところで発生すると説明している。一般教養のためにはマスコミからの情報が必要である。

HTC_S08_wav01 【10:57～17:52】長谷川（ジャパンタイムズ）？

オリンピックの準備について。聞き手は男性。様々な準備がなされてきたが、資金をどこから集めるのか見込みが立っていないのが現状であると説明している。日本の言論の自由について語っている。

HTC_S08_wav01 【19:28～23:15】ニュース

ハワイのローカルニュース。

HTC_S08_wav02 【00:07～03:01】中曾根美樹

(話中から始まる) ハワイでの公演前のインタビュー。聞き手は女性。母親が沖縄出身であり、誇りを持っている。

HTC_S08_wav02 【03:05～08:08】

(話中から始まる) ハワイ出身の二世の歌手、テリーへのインタビュー。聞き手は女性。フランク・シナトラと共に演したときの話について。今後は映画に出演したい。

HTC_S08_wav02 【09:34～25:08】山野愛子

聞き手は女性。ニューヨークで開かれた国際ビューティーコンテストに審査員として参加している。日本からは 11 人のトップアーティストが参加した。54カ国が参加し、ファッションショーでは『君が代』のレコードを流した。ふだんの肌のお手入れについて。話中で切れる。

HTC_S08_wav02 【25:11～36:32】山野愛子

日本では今はアメリカモードのほかにフランスやイタリアのモードが流行している。流行を理解しながら個性を生かすことが大事だと語っている。

HTC_S08_wav03 【00:00～6:47】11月26日 モリシゲ

モリシゲに対してホノルル国際空港でインタビュー。聞き手は女性。メキシコ旅行に行き、感激した話。玉川学園に通う息子（イズミ）とその同級生 40 人程度が、1 年前にメキシコのオアハカを訪れた。モリシゲは息子がお世話になった家族にお礼を言うため、メキシコを訪れた。

S09 Bill Hosokawa Interview

【ファイル名】HTC_S09_wav01

【ホストスピーカー】Dick Gima

【ゲストスピーカー】Bill Hosokawa

【言語】English

【放送日】1965年5月25日

【開始】00:00:10

【終了】00:22:40

コロラド州デンバーから、アメリカ本土で著名な日系二世であるビル・ホソカワをゲストとして迎える。ホソカワは、イーストウェストセンターでおこなわれるアジア系アメリカ人女性ジャーナリストの会議のためにハワイを来訪している。5月27日土曜にハワイ大学で講演をおこなう。ホソカワはデンバー・ポストで約20年間働いている。ワシントン大学を1937年に卒業した。学生新聞にもかかわった。不況下で学費を稼ぐために、学外の新聞社で働いた。高校のときにはフットボールをしており、ポジションはセンターだった。高校を卒業したら何になりたいか決められずにいたため、4年半高校に在学した。人種差別があり、仕事を見つけるのは困難であった。1年半シンガポールの新聞社で、1年上海の『上海タイムズ』と雑誌『Far Eastern Review』で働いた。1941年の夏にアメリカへ戻った。

JACL (Japanese American Citizens League, 日系アメリカ人市民同盟) は1920年代に、アメリカ本土の二世が政治的責任、市民の責務を感じ始めたころに始まった。しかし戦前はそれほど影響力がなく、活動的でもなかった。強制収容に反対する行為を避ける方針を決めて以降、日系アメリカ人が完全な忠誠なるアメリカ市民であることを示そうとした。JACLのマイク・マサオカは（アメリカ陸軍の）戦時局と関係が深かった。彼らは（日系人に対する軍からの排除という）方針を転換し、442部隊として二世を従軍させた。二世兵士の犠牲はアメリカの人々の日系人の支持を高めた。なぜハワイではJACLが著名でないのかという質問について、アメリカ本土より政治的に洗練されているからではないかと推測する。アメリカ議会に日系人の議員を3人送っているのはハワイである。

コロラドは（人種的に）啓蒙されている数少ない地である。日系人は約7000人住んでいる。西海岸の3州では、日系人に対する差別が厳しい。ワシントン州には今も外国人土地法がある。JACLが変えようとしている。

新聞記者としてのハイライトは、1950年代に3ヶ月韓国に行ったことである。他には、1960年フルシチョフ、アイゼンハワーなどが出席するパリのサミット会議に行き、記者会見に参加した。

子どもは4人いる。長子は、オレゴン州ポートランドのルイス＆クラーク大学でHealth

Education を教えるながら、スポーツのコーチもしている。次の子どもは、コロラド大学をちょうど卒業した。ほかには高校生の子どもが 2 人いる。

ハワイがアメリカの一部であることは価値あることである。経済的にもアメリカに統合されており、政治的にも強力で、重要な軍事拠点でもある。

S10 Re-evaluation of faith by Dr. Kazuo Miyamoto

【ファイル名】HTC_S10_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】Kazuo Miyamoto

【言語】English

【放送日】1974年9月29日

【開始】00:00:00

【終了】00:17:44

9月13日にアラモアナバンケットホールで開催されたリデディケーション・ディナーのゲストスピーカーとして、医師で作家であるカズオ・ミヤモトが「Re-evaluation of Faith」と題したスピーチを行った。

「創生者を信じますか？」と言う仏教の教えの基礎的な質問からスピーチは始められる。創生者は仏教の世界には存在しないとミヤモトは語る。創生者という概念は、メソポタミアなどの砂漠地帯の人々によって生み出されたと言う。仏教はもう少し穏やかな気候地帯であるインドで生み出された。ブッダは神ではなく1人の人間である。キリスト教やユダヤ教では人が死ぬと、神々の世界（天国）へ行くと言われているが、仏教では死人はブッダの一部となると言う。

仏教にはカルマという考え方がある。他の宗教では、神が全ての権限を持っている。カルマとは全ての事柄には由縁があるという意味だが、自分の遺伝子を考えると分かりやすい。自分の個性や性質は祖先から受け継いだ遺伝子によって作りあげられていて、自分の遺伝子もまた、子供や子孫に受け継がれていく。

S11 篠遠インタビュー タヒチ 井上宗玄

【ファイル名】HTC_S11_wav01、HTC_S11_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】篠遠喜彦

【言語】日本語

【放送日】不明

HTC_S11_wav01 【開始】00:00:30 【終了】00:18:11

HTC_S11_wav02 【開始】00:00:05 【終了】00:03:44

【HTC_S11_wav01】

井上宗玄が亡くなった。彼の思い出について篠遠喜彦が語る。1954年にハワイ大学の学生として入学したときの同級生であった。1956年に、布哇報知が行ったヌアヌパリなどの考古学の調査隊で、井上は秘書として篠遠を手伝った。

妹のヨウコや、弟のズイケンも同時期にハワイ大学へ入り、一緒にキャンパスへ通った。ホラン教授の陶芸の授業と一緒に履修した。フーバー・立石も一緒にクラブを作るなどしていた。

井上が胃の調子が悪いと篠遠が知ったのは、タヒチへ調査に行っている間であった。篠遠の妻和子がマーケットで見かけた井上の様子が毎回悪そうだったり良さそうだったりと安定しないので、ガンなのではないかと話したそうだが、篠遠は考えすぎだと思っていた。

【HTC_S11_wav02】

1962年からアメリカ国立科学財団（National Science Foundation）の助成によってポリネシアの考古学調査を3年計画で行っている。今年度が最終年度のため、早めにフィールドワークを終えて研究成果をまとめたいと思っている。マルキーズ諸島の調査を行う予定。

S42 5月5日用 マイク・インタビュー

【ファイル名】HTC_S42_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】藤原氏、ミセス東、ボブ・小島さん、ミセス小島

【言語】日本語

【放送日】不明

【開始】00:00:07

【終了】00:09:50

【00:07～02:10】カパフル劇場に勤務の藤原氏（博文堂の息子）

藤原氏は博文堂の息子である。ハワイで生まれて1歳で日本へ帰り、9年前にハワイへ戻ってきた。

【02:15～04:50】ポーラ化粧品のセールス・レディ ミセス東

ミセス東はハワイ生まれ。4歳のときに家族と日本に帰った。5年前からポーラに勤めている。

【04:54～07:28】オーケストラのボブ・小島さん

ボブ・小島氏は25～6年の間、音楽をしている。最初に触れた楽器はウクレレである。彼は古賀政男や島倉千代子や春日八郎らの伴奏をした。ミュージシャンは副業で、本業ではアメリカン・ファクタスで働いている。

【07:31～09:48】ボブ・小島さんの奥さん ミセス小島

ミセス小島は東京都王子出身である。ハワイへ来て3年が過ぎた。

S43 Hawaii's Japanese

【ファイル名】HTC_S43_wav01

【ホストスピーカー】チャールズ・ケクマノ

【ゲストスピーカー】N/A

【言語】英語

【放送日】不明

【開始】00:00:25

【終了】00:09:50

先住ハワイアン系モンシニョールのチャールズ・ケクマノ（Charles Kekumano）によるラジオ放送。1880～1890年代のハワイの日本人の初期移民に焦点を当てる。初期の移民は、同郷、同県から移民し、ハワイでは集団で配耕された。そのため親族的なつながりが強く、ハワイでもそれぞれの方言を使うことができた。コミュニティで発展したものとしては、日本の風習にのっとった公衆浴場が挙げられる。単身男性が利用する月額の食堂もあった。単身男性からは食事の用意や洗濯などの需要があり、これらを請け負うサービスが発展した。他にも、床屋や豆腐屋などを副業で営む人もいた。

日本人コミュニティが成長すると、呉服や、麺の製造や日用品、茶屋やレストランなど新たな日本人向け産業が発展した。言語教師の需要もあった。新聞を編集するためには通訳が必要であった。華道、茶道、日本舞踊の指導者もいた。

初期の日本人移民は、日本の食文化において重要なしようゆやみそなどを手に入れられず、米の値段も高かった。先に移民していた中国人が1857年から稻作を始めていたことと、みそやしようゆを輸入していたため、それらを手に入れた。プランテーション労働者は、給料をためてビジネスに着手していったほか、日本からビジネスマンも来ていた。後にオザキ・カンパニーを設立したサンシチ・オザキもビジネスの先駆であった。「ヒロのクニ」と呼ばれるクニソ・スズキは、千葉県で生まれ、18歳で来布した。彼ははじめマウイのプランテーションで働き、その後ハウスサーバントとなり、1885年ヒロに店を開いた。

1890年代、ハワイに進出した日本の大企業は、日系コミュニティがハワイ中に散らばっていたために、苦境にあった。代わりに、コミュニティ内で発展した小さい商売が発展をつづけた。しかし、日本人がハワイに定着し始めたころ、アジアでは1894年、日清戦争が勃発した。日本に呼び戻された男性は日本軍に従軍した。ハワイの日系コミュニティも、日本の戦況に影響を受けた。下関条約が結ばれると、ハワイでも祝勝された。

コナ・ヘマ（Kona Hema, South Kona）という曲の紹介が入る。ヘマ（Hema）はハワイ語で左という意味である。方角を決める際、西に向かうと左側が南となる。日が沈む西を見ると、南は左となる。

リリウォカラニの王位が打倒させられた後の 1895 年までに、日本人によるビジネスは発展していた。コレラの発生により、ホノルルに寄港する船から日本の輸入品を仕入れることができなくなった。日本人のビジネスは経済的困難に陥った。1898 年には、ヒロにホテルやレストランなど 18 の日本人所有の店があった。金を稼いで日本に帰る人たちもいたし、ホノルルに進出した人もいた。1900 年には、仏教会、病院、日本語学校、野球チームなどができていた。1898 年、日本人のプランテーション労働者は月 15 ドルを稼いだ。自由労働者は一日に 1 ドル稼ぎ、月単位ではプランテーション労働者の倍を稼いだ。物価は現在とは大きく異なる。1900 年、人口が密集していたダウンタウンの大火災が起こった。腺ペストの拡大を抑えるために隔離された家々を計画的に焼いたが、火が回り大火災となった。6000 人が家を失い、3500 の日本人が家を失った。

S44 Shigeo Shigenaga

【ファイル名】HTC_S44_wav01、HTC_S44_wav02、HTC_S44_wav03

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】重永重雄、イナムラキンゴ

【言語】日本語

【放送日】1975年7月8日、1975年

HTC_S44_wav01 【開始】00:00:27 【終了】00:32:20

HTC_S44_wav02 【開始】00:00:27 【終了】00:32:20

HTC_S44_wav03 【開始】00:00:27 【終了】00:32:20

HTC_S44_wav01 【00:00～18:24】 Shigeo Shigenaga re: Eisaku Sato

日本へ行っていた5月中旬、滞在先のホテルで佐藤栄作の体調不良のニュースをみた。それから1週間ほどして佐藤氏は亡くなった。葬儀に参列し、遺族に挨拶がしたいと6月11日に再度日本へ渡った。妻に話を聞くと、倒れたまま何も言わず意識不明のまま亡くなつたという。

HTC_S44_wav02 【00:00～18:24】

Wav01と同じ。

HTC_S44_wav03 【00:00～12:40】カッパ座

イナムラ・キンゴプロデューサーのインタビュー。大阪府富田林のPL教団の遊園地で生まれた。教主であった御木徳近が、遊園地の来場者を楽しませるアイディアとして提案した。2年前ブラジルで、ポルトガル語と日本語の同時録音テープを使用した二言語で人形劇を行ったところ、とても評判が良かった。日本の外務省と国際交流基金からの援助もあり、その英語版をしようとのことでハワイにやってきた。マッキンリーハイスchoolや、イーストウェストセンターで、桃太郎を題材にした劇と、白雪姫をベースにした白雪姫と7人のカッパを上映する。

S45 日蓮宗別院 望月恒龍、出雲大社 宮王

【ファイル名】HTC_S45_wav01

【ホストスピーカー】フーバー立石

【ゲストスピーカー】望月恒龍

【言語】日本語

【放送日】1962年1月1日

【開始】00:00:00

【終了】00:16:08

ヌアヌ街の日蓮宗別院を訪ね、望月恒龍に新年の言葉を聞く。望月はハワイに来て30年が過ぎた。戦争のこと驚き、日本でのことは忘れてしまった。日本の正月では、朝2時半に起きて、師匠が顔を洗う水をくんだ。井戸をくみ上げるとき、寒さに手が滑る感じで恐ろしかった。それからお経をあげて元旦の日の出前にお勤めを済ませた。

キャンプ生活での正月について。学校を中心とした日本人の会があった。元日の朝学校に集まって新年の祝賀会をした。寺では自分だけでお経をあげて済ませた。

第二次世界大戦は12月7日に始まった。12月5日に家族を迎えてハワイ島へ行った。法要の席で戦争が起きたという知らせをもらった。それでもホノルルに帰ろうとした。その次の正月は、めでたいものにはならなかった。

出雲大社の宮王に初春の話を聞く。寅年であるから元気よく景気のいい年になってほしい。初太鼓が奉納され、ハワイの繁栄や健康が祈祷された。お参りした人にはお神酒が降るまわれた。ハワイで印象深い正月は、ハワイに来た1931年の次の1932年の初めての正月である。ハワイで正月を迎え、初太鼓を奉仕した。終戦後、神事を始めたことも思い出深い。テキサスのクリスタルシティのキャンプ(収容所)では日の丸を立てたことも印象に残っている。

S46 マッキンレーハイスクール

平田みどり 久保田あき子

【ファイル名】HTC_S46_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】平田みどり、久保田あき子

【言語】日本語

【放送日】1960年11月25日

【開始】00:00:08

【終了】00:36:52

「よいこの時間」

子ども向けの教育ラジオ。日本語が上手な高校生をゲストに、日本語をたくさん話す番組。久保田は一年前に日本語学校を卒業し、平田はこれから日本語を卒業する。2人ともマッキンレーハイスクール の1年生。

二人は外国語まつりで、久保田と平田は「母の顔」という会話劇を披露した。これは2人で書いた作品である。当日の録音を放送する。また、日本語を勉強する大切さについての即興劇を番組中に披露した。

S48 総領事館

【ファイル名】HTC_S48_wav01

【ホストスピーカー】フーバー立石

【ゲストスピーカー】ツチヤ、コバヤシ・ニッショウ、ホリウチ・ススム、ディック・ゴトウ、ヨシダ・ノフジ、マエヤマ・ホッカイ

【言語】英語

【放送日】1962年1月4日

【開始】00:00:08

【終了】00:16:18

1962年1月3日に、ハワイのジャーナリスト等から新年の挨拶をもらう。聞き手はフーバー・立石。総領事館の新年パーティーの会場にいた人たちへのインタビューと推測する。

雑誌を発行する予定で、文筆業を45年続けるツチヤ。寅年の抱負。猫のように優しい心でいきたい。ツチヤははじめ報知（『ハワイ報知』か）に5～6年勤め、雑誌に移った。

ハワイ毎日社のコバヤシ・ニッショウ社長。寅の年にちなんで奮闘したい。獰猛な虎のような勢いを持ちたい。ハワイの立州にともなっていろいろな変動が起こっている。不幸を招いた人もいるが、それは建設のための破壊であり、必ず開拓ができる。コバヤシは24歳のときから、千葉毎日新聞の主筆を勤めた。政友会の御用新聞のような立場であり、国会に出入りしていた。文筆業を始めて43年が過ぎた。その間に実業界へ出ておりブランクがあるが、そのおかげで外から新聞を見るという勉強ができた。

KAHU放送局日本人部主任のホリウチ・ススム。立石とホリウチは今日（1月3日？）総領事館のパーティーに招かれた。2人はKPOA時代から一緒であった。1951年日本語放送部からアナウンサー業に携わってから12年である。

KGU日本語放送部主任のディック・ゴトウ。ラジオの仕事をしてから18年ほどである。戦後はKHONにいたこともある。

KGMB所属及び画家のヨシダ・ノフジ。明治35年寅年の生まれ。子どものときから絵が好きで、ハワイでも新聞社にいながら絵を描いていた。『ハワイ報知』の新聞記者から1925年に転身してボストンで絵の学校に入り画家を職業とするようになった。ヨーロッパに行くスカラシップ（奨学金）を得た。ボストンの美術学校の卒業証書を自宅に飾っているが、日付が入っていない。

ハワイ報知社のマエヤマ・ホッカイ。新聞の「貿易風」で有名。ハワイに来てから51年になる。もともと商売人であったが、損をしたため新聞記者になった。1929年から1932年までハワイ毎日、その後電報新聞に入り、商売をするなどして、日布時事に入り、戦時中編集長をした。戦後日本に新聞検閲官として行き、帰ってから報知に入った。

S49 神戸新聞論説委員長 畑 ○一郎（セイイチロウ）

山本キヨツグ（北陸放送専務）

【ファイル名】HTC_S49_wav01、HTC_S49_wav02

【ホストスピーカー】フーバー立石

【ゲストスピーカー】畠せい一郎、山本キヨツグ

【言語】日本語

【放送日】1959年？とあり

HTC_S49_wav01 【開始】00:00:09 【終了】00:31:33

HTC_S49_wav02 【開始】00:00:00 【終了】00:31:29

HTC_S49_wav01 【00:09～31:33】タケイチ、畠へのインタビュー

タケイチは四日前にハワイへ到着して以来、スケジュールに追われる日々である。少し予定を詰め込みすぎたのではないかと思っている。日本の新聞が抱えている「不当競争」について、アメリカの新聞の状況を視察するためにハワイを訪れ、後にアメリカ本土でも視察をする予定である。タケイチの新聞社（四国の地方紙）では、大学卒業後の初任給は11500円で30ドル程度である。

畠は20年前から新聞社に勤めており、東條内閣の頃は官邸記者であった。15年ほど前から論説委員をしている。日教組の動きと、いわゆるマッカーサー憲法に関する畠の見解を説明する。その後、「三人」の送還問題と、日本人の「三人」に対する態度について畠が思うことを語る。また、皇太子の結婚式とメディアの役割について述べる。新聞記者をしていて一番記憶に残っているのは、東條英機を取材していたときであったと言う。

畠はワイキキで海水浴をしたが、日本のようにワイワイガヤガヤした様子もなく、落ち着いた雰囲気でよかったと感じた。日本では男女と一緒にいるだけで、白い目を向けられるが、ハワイでは男女が愛情の表現を自由にしても誰も気にしないのが進んでいると思った。

HTC_S49_wav02 【00:00～31:29】「何でも聞いてやろう」

ハワイでは桜まつりが開催されており、日本からは松竹歌劇団が来ている。山本が日本からワシントンに降り立ってみると、満開の桜に迎えられた。日本の桜とは少し異なるようで感動した。敗戦後の日本は道徳が問題であるという。最近の若者は、新しい憲法をしっかりと読まず、自由と権利だけ主張し義務を果たさない傾向にあると語る。新聞のジャーナリストを経て、民間放送に関わる仕事を10年ほどやってきた。今日ではNHKだけでなく民間放送が増え、映画だけであったものが各家庭でラジオやテレビが普及してきた。

S50 Reminiscences

【ファイル名】HTC_S50_wav01、HTC_S50_wav02

【ホストスピーカー】フーバー立石、新垣、田辺、松本

【ゲストスピーカー】小林旭、北杜夫、石井昭之

【言語】日本語

【放送日】1961年4月11日、1962年1月9日、1962年1月27日、1962年月日不明

HTC_S50_wav01 【開始】00:00:00 【終了】00:22:3

HTC_S50_wav02 【開始】00:00:13 【終了】00:31:29

HTC_S50_wav01 【00:00～12:19】「話の散歩道」ハワイの風呂屋、1961年4月11日

語り手は男性。住宅が発達し、今や各家庭にバスやシャワーが完備され、一つの家に二つのバスルームがある家もある。ホノルルに残る昔懐かしいジャパンスタイルのお風呂屋さん「ふじのゆ」を訪ねる。この店はナカバという60歳くらいのおばあさんが経営している。約50年前、順に本式に建てられた。手ぬぐいと石鹼を借りて25セント、持参の人は15セントになっている。付近に2軒お風呂屋が残っている。区画整備のため、いずれは立ち退きとなるだろう。日本では相変わらず銭湯は大繁盛である。各家庭に風呂ができる、まだ庶民の憩いの場所となっている。10～20円つまり3～6セントくらいが平均である。いつの時代も景気がいいのは風呂屋と質屋だと言われている。職業に貴賤なく、みな裸で風呂に入り平等である。

HTC_S50_wav01 【12:42～22:31】小林旭インタビュー（新垣）、1962年1月9日

日活スター小林旭が日本へ帰国する前に、新垣がホノルル空港でインタビューしたもの。小林はアメリカ本土へのお忍び旅行の後ハワイに立ち寄った。翌日から、「さすらい」というサーカスの映画の仕事である。アメリカへは、JumboというMGMのサーカスの映画の撮影を見学するために行った。小林が善玉を演じた渡り鳥シリーズで相手役を演じた宍戸錠の弟である郷鏨治が、次の小林の相手役を務める。小林は休みの日はゴルフ、クレーン射撃、ボウリングをする。ファンレターの返事には直筆を入れている。本物の西部劇を撮ってみたいと思っている。

HTC_S50_wav02 【00:13～16:26】北杜夫（田辺アナ）、1962年1月27日

ゲストスピーカーは『どくとるマンボウ航海記』著者、精神科医の北杜夫。聞き手は田辺アナとフーバー立石。北は新潮社からの依頼で旅行記を書くために南太平洋の島々を訪ねた。ポリネシア、タヒチ、フィジー、サモアについては、交通公社の人でも知らない。フィジー、サモアでカバという木の根を水と一緒に搾った汁であるカバ酒を飲んだが、泥水のよ

うだったと語る。『夜と霧の隅で』を書いて体調を崩したので、気楽に『どくとるマンボウ航海記』を書いた。海外に行くと日本のことを見ることに気付き、古典を読んで勉強しようと思うが、帰国しても結局勉強しない、と語った。

HTC_S50_wav02 【16:27～30:13】「寿司談義」石井昭之、松本、1962年

「べにづる」の石井に、寿司について聞く。聞き手は男性（松本？）。握りずしは魚の鮮度に重点を置き、品物を切らさないようにする。巻いたものをアイスボックスにしまうのは邪道である。ごはんや魚がドライになってしまう。大阪寿司は押しすし、太巻きが発達している。江戸前寿司はにぎりで、新鮮さが重視される。もともとは戦争の際、大名が発酵させて保存した魚をごはんの上に乗せ、握りのような形にしたのがはじまりと言われる。作り手の威勢のよさ、気風を感じて食べてほしい。5～10人の客を相手しながら、いくつ食べたかを暗算で勘定する。

HTC_S50_wav02 【30:14～31:40】野球中継
大洋ホエールズ対ハワイアイランダーズ。11対9。

S51 Success of Japanese in Hawaii

【ファイル名】HTC_S51_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】今東光

【言語】日本語

【放送日】1959年8月7日

【開始】00:00:00

【終了】00:30:54

今東光への男性聞き手によるインタビュー。日本からハワイへの観光団について話している。日本人は労働運動でハチマキを頭に巻いて、赤旗をふって歩く姿をやめてほしいと思っているという。また、日本の政治では岸総理は誰にも褒められず批判もされない。いるかいないのか分からぬ様子だと語っている。

日本の仏教はどのような道をたどればいいか、という質問に対して、今は仏教の筋を通したものにしなくてはいけないと答えている。仏教についてもあれこれ言ってきたので、日本の仏教界には敵がいろいろできたとも述べる。

ハワイのジャーナリストは、日本のジャーナリストよりも良くはないと今は語る。取材の態勢にも問題があるとも述べた。

S52 キヨシ・マキタインタビュー

【ファイル名】HTC_S52_wav01

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】マキタ・キヨシ

【言語】日本語

【放送日】1963年

【開始】00:00:00

【終了】00:13:38

ニューヨーク世界博覧会ⁱに、日本からの参加が予定されている。ニューヨーク世界博覧会協力会、ニューヨーク事務所長のマキタ・キヨシに話を聞く。

来年開かれる世界博覧会では、ニューヨークのフラッシング・メドウの公園で、かつてない規模の産業館やアミューズメントエリア、アメリカ各州の展示と、日本を含む60か国インターナショナルエリアが開かれる。昨年シアトルでは半年間で約1000万人が来場したが、来年、再来年の開催ではより規模が大きくなる。前評判では、日本からの来場者に期待が高まっている。

ニューヨーク世界博は、各国政府あるいは政府に代わるJETROのような団体を中心になっておこなっており、約5万平方フィートの土地を日本の会場として確保した。しかし、府の予算では足りなかった。そこで財界有力者、貿易関係者と相談して民間の力で政府に協力しようとしてできたのが社団法人の博覧会協力会である。貿易自由化を控え、民間企業が盛り上がっている。費用は日本が持ち、運営費、建築費を合わせて35~36億円の予算を見積もっている。

日本に関する展示会場は3つに分かれており、ひとつは政府すなわちJETROが2万5000平方フィートを使う。あと二つは協力会が、日本の輸出振興に役立つような産業を展示し、日本食堂と劇場を出展する。3つ合わせるとインターナショナルエリア内で最大である。

2年目は、1年目の実績を見ながら改良を加える。

ⁱ 1964、1965年、フラッシング・メドウズ・パークで開催

([https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%82%AF%E4%B8%87%E5%9B%BD%E5%8D%9A%E8%A6%A7%E4%BC%9A_\(1964%E5%B9%B4\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%82%AF%E4%B8%87%E5%9B%BD%E5%8D%9A%E8%A6%A7%E4%BC%9A_(1964%E5%B9%B4)))。

S53 Interviews

【ファイル名】HTC_S53_wav01、HTC_S53_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】新珠三千代、森繁久彌、三木のり平、フランキー堺、加東大介、小林桂樹、加山雄三、村田英雄、佐川ミツオ、渡辺マリ、高峰秀子、松山善三、田村高廣

【言語】日本語

【放送日】1961年10月28日、1961年12月22日、1963年3月13日

HTC_S53_wav01 【開始】00:00:00 【終了】00:29:46

HTC_S53_wav02 【開始】00:00:21 【終了】00:28:19

HTC_S53_wav01 【00:00～04:36】新珠三千代

新珠は宝塚に所属していた。インタビュワーは女性。新珠は、松本清張の作品に出演している。海外はいろいろなところへ行ったことがあるが、ハワイは初めてである。「社長シリーズ」の撮影でハワイへきた。

HTC_S53_wav01 【04:37～06:00】森繁久彌

森繁が以前にハワイへ来たときは晴れだったが、今回は雨であった。そのおかげで撮影がなく、いろいろなところに出向くことができた。ぜひハワイの人々も日本に来て、変わった故郷の姿を見てほしいと語る。

HTC_S53_wav01 【06:03～06:57】三木のり平

三木はハワイに来るのは初めてだと語る。ビーチで甲羅干しをする様子など、とてもいいと思った。

HTC_S53_wav01 【07:03～08:38】フランキー堺

堺がハワイに来るのは3回目と言う。今回のハワイは仕事のために訪れた。「社長外遊記」という作品の中で、ハワイの日系三世の役を演じたと言う。

HTC_S53_wav01 【08:42～12:01】加東大介

東映の映画俳優。よく日本では「〇〇を食べてハワイに行こう」など言うように、日本人にとってはハワイに行くことは憧れである。アロハシャツやムームーは昨年ごろから日本の俳優たちも制服のように着ている。日本から遠い、なかなか行けないところだと思っていたが、来てみるとすごく近く、英語も必要ないので身近に感じた。

HTC_S53_wav01 【12:02～14:17】小林桂樹

小林の渡布は「山河あり」のハワイロケ以来であるという。前回の作品とは異なり、今回の「社長外遊記」はコメディ作品である。ハワイの人にも楽しんでもらいたいと語る。

HTC_S53_wav01 【14:27～29:46】加山雄三、1963年3月13日

「ハワイの若大将」撮影のためにハワイへ来た加山雄三のインタビュー。聞き手は女性。加山は大学4年の半ばごろ、俳優になることを決めた。それまでは造船技師になるつもりであった。現代劇でなく時代劇にも出たが、時代劇ではその当時の習慣を現代の人の感覚に伝わるように演じたいと話した。同じく撮影でハワイへ来ていた星由里子は、加山雄三がなんでもできるので羨ましいと話した。

HTC_S53_wav02 【00:21～16:20】村田英雄、佐川ミツオ、渡辺マリ、1961年10月28日 3人に対するインタビュー。聞き手は女性。村田は5歳の頃から舞台で活躍している。浪曲で新しい雰囲気を取り入れると、批判を浴びた。ハワイでは明治時代の人間がいるので、浪曲の受け入れられ方が日本と違うと村田は感じている。

佐川は神戸出身。最初はロカビリーを演奏していた。ハワイと日本では客層が違い、また拍手の量も違うと語る。歌っていることが一番楽しいが、演技をするのも楽しいと感じる。渡辺マリはえりちえみや黒人歌手の歌が好きである。自分では弾んだ歌が好きだが、そろそろブルースを歌えるようになりたいと語る。

HTC_S53_wav02 【16:29～24:00】高峰秀子、松山善三、1961年12月22日

夫婦に対するインタビュー。聞き手は女性。夫婦は12日ぶりに会った。夫婦は結婚8年目となる。映画監督である松山の次作「山河あり」は、ハワイについてである。ハワイに関する映画はいくつもあるが、どれもハワイを楽園のように描くのみである。しかし、松山はこの楽園を作った人々の苦労を描きたいと思っているという。妻の高峰は同作のヒロインである。

HTC_S53_wav02 【24:01～28:19】田村高廣、1961年12月22日

「山河あり」に出演する田村に対するインタビュー。聞き手は女性。田村はデビュー8年である。最近は時代劇にはせず、現代劇に多く出演している。生活を感じられるような作品に出演したいと思っているという。阪東妻三郎の息子として知られているが、父の名前のおかげで仕事につながるということは大変ありがたいことだと感じているという。

S54 村中とし江インタビュー

【ファイル名】HTC_S54_wav01、HTC_S54_wav02

【ホストスピーカー】不明

【ゲストスピーカー】村中とし江

【言語】日本語

【放送日】不明

HTC_S53_wav01 【開始】00:00:06 【終了】00:09:11

HTC_S53_wav02 【開始】00:00:14 【終了】00:32:41

HTC_S53_wav01 【00:06～09:11】村中とし江、審査員。

ハワイ代表に決まった村中とし江に話を聞く。聞き手は男性。審査員や司会が感心していた。予選でも同じ民謡「江差追分」を歌った。江差追分を選んだ理由は、以前歌ったことがあったため。ハワイ代表になり、日本で民謡の全国大会に出場する。

審査員に話を聞く。村中は声の使い方が上手であった。心の置き所は教える、覚えるのではなく、自分自身で発明することによって上達していくだろう。村中はハワイ生まれで日本語にハンディキャップがあるが、追分は発声の特徴がないため問題ない。全国大会は決勝者6人で、来年2～3月ごろおこなわれる。気持ちと気迫を悟ってほしい。精神的な表現で判断することになる。

HTC_S53_wav02 【00:14～01:38】

ハワイを訪れた社長のヤマザキからの言葉。ハワイを訪ね歓待を受けた。民謡をぜひ引きたて願いたい。

HTC_S53_wav02 【00:14～32:41】ハワイの民謡大会、野外会場の音声。

このハワイの民謡大会はテレビ中継もされた。審査員は日本から来た民謡の先生である。1曲目、熊本出身の女性の歌への審査は、5点、4点、5点。審査員は、低い声がよく、高い声はのどを少し締め付けているという評価であった。2番目はハワイ島から出場した山口県出身のカワモト。17歳、57年前にハワイへ来た。歌は「三階節」。得点は4点、5点、5点。声はいいが色気がほしいという評価であった。3番目はオアフ島在住の男性。歌は「ホレホレ節」。得点は5点、5点、5点。審査員は、ホレホレ節はハワイの民謡だと認めた。4番目は着物を着た女性で、散髪屋。歌は島根県の「安来節」。得点は5点、4点、5点。リズムが少々乱れていた。5番目は村中とし江。村中はハワイ生まれでマウナケア在住。歌は「江差追分」。得点は5点、5点、5点。ハワイでこんなにうまい追分を聞くと思わなかったという評価であった。6番目はハワイ島ヒロ在住の女性。熊本県の民謡

「おてもやん」。得点は 5 点、5 点、5 点。少しリズムの乱れたところがかえっておもしろかった。

出場者 6 人のうち 3 人が満点であった。そのなかから一人、「江差追分」を歌った村中とし江が優勝した。

S55 私の人生読本

【ファイル名】HTC_S55_wav01

【ホストスピーカー】大巴賢充

【ゲストスピーカー】大西良慶

【言語】日本語

【放送日】1964年7月5日

【開始】00:00:00

【終了】00:38:09

大西良慶がゲスト。聞き手の大巴賢充は、この収録の5年前に五条坂の妙純寺（京都・日蓮宗明星山妙純寺）で大西の説教を聞いたことがある。その頃からどうにか大西をハワイに紹介したいと思っていたら、ひょっこり大西がハワイに来た。鑑真和尚が日本に来てから1200年の年であるため、日本全国でそのお祝いがいろいろと企画されている。

大西は清水寺の和尚（管長）であり、寺の縁起を説明する。清水寺は源平の時代から伝わる様々な伝説がある。清水寺の舞台は徳川家光時代に作成されたものである。大西は明治8年12月21日生まれ。民生委員や調停委員など社会活動を行っている。大西によると祇園の舞妓や芸妓は他所から流れてきた人が多いという。京都は他所から流れてきた人を歓迎せず、祇園によそ者を集めている。祇園の人々は信心深く、いろいろとした個人的なことを相談されるので、民生委員や裁判のこと、養老院のことなどを手伝っているという。

大西の説法は堅苦しくなく、漫談のように面白いと大巴は思う。法を説くとは、聞く人と説く人が相通じたときに達成されるというのが仏法の建前である。真理というものは説けるものでなく、悟るものである。相手に伝わるように話さなくてはいけない。伝わるために、相手の顔を見て表情や感情を見ながら話をしなくてはいけない。

S56 今東光

【ファイル名】HTC_S56_wav01

【ホストスピーカー】N/A

【ゲストスピーカー】今東光

【言語】日本語

【放送日】1971年1月26日

【開始】00:00:00

【終了】00:26:18

講演会で三島由紀夫の腹切り問題について話す今東光の録音。左翼は、三島の切腹によって、軍国主義がひどくなるだろうと予想している。しかし、三島の師である川端康成も今東光も、その見解には否定的である。これまで時期尚早と思い、ジャーナリストへの質問に答えてこなかった、三島の死について話す。

三島の希望は憲法改正であった。細かい方針は異なるが、今も同じように憲法改正論者である。今は宗教の立場から憲法改正を望み、三島はまた別の立場から改正を望んでいた。三島はかなりせっかちで、クーデターを起こしてしまった。志したことが叶わなければ、切腹するというのは日本の伝統である。今の発言もある箇所だけを抜き取って軍国主義だと批判された。現在の自衛隊は同盟国の援助のためにも10日間しか戦うことができず他国の侵略などできるものではない。それにも関わらず、日本では軍国主義が戻っているなどという人がいる。

現在では日本の立場がだんだんと戻ってきた。日本政府は日系人の功績をたたえなくてはいけない。民衆外交を推し進めていきたい。愛国ということでなく、同じ日本に祖を持つものとして支え合っていきたい。

質疑応答において「三島は憲法をどういうふうに変えていかなくてはいけないと言っていたのか」という質問に対して、今は三島が自衛隊の権力のなさに気付いたエピソードを答えた。

S57 私の人生読本

【ファイル名】HTC_S57_wav01

【ホストスピーカー】N/A

【ゲストスピーカー】坂本

【言語】日本語

【放送日】1962年4月20日

【開始】00:00:00

【終了】00:04:34

「何でも聞いてやろう」の前枠・後枠の収録音声。協賛の花屋の宣伝など。

S58 Shimeji Kanazawa's speech, Hawai'i Senior Citizen

【ファイル名】HTC_S58_wav01

【ホストスピーカー】N/A

【ゲストスピーカー】シメジ・カナザワ

【言語】英語

【放送日】不明

【開始】00:00:00

【終了】00:21:34

シメジ・カナザワ (Shimeji Ryusaki Kanazawa) によるハワイで歳をとることについてのスピーチ。ボストンはハワイの家族観に大きな影響を与えた場所である。なぜかというと、ハワイに到着した最初のキリスト教宣教師たちはボストンからやってきた人々であったからである。彼らが持ち込んだキリスト教的価値観は、今日のハワイの人々にも影響している。ハワイの人々は様々なバックグラウンドを持っている。ポリネシアにルーツを持つハワイアンは、Aloha という言葉をもたらしてくれている。アロハ(Aloha)の A はアカハイ(Akahai, 優しさ)、L はロカヒ (lokahi, 紐帯)、O はオルオル ('olu'olu, 同調できる)、H はハア (Ha'aha'a, 謙虚)、A はアホヌイ (Ahonui, がまん) であると、ピリアヒ・パキ (Piliahi Paki) によって定義された。ハワイ語には Kupuna (お年寄り、祖父母、先祖) という言葉がある。クプ (Kupu) は成長するという意味である。

中国からの移民はハワイに孔子の教えを持ち込んだ。また仏教の教えも広まっている。盆踊りなどに象徴されるように、尊敬・尊重するという文化がある。現に、多くのハワイの若者が収入などで自分の親を支えている。ハワイでの 65 歳以上の人口は全体の 5.7% と、比較的若者が多い州である。労働者として単身で移民してきたフィリピン系の男性が高齢となり独り身で暮らしているという問題はあるが、アメリカ本土で問題視されている大きな問題には発展していない。アロハの精神や、キリスト教の兄弟愛、そして仏教的価値観がこのような大きな問題がない社会を作っている。

S59 インタビュー

【ファイル名】HTC_S59_wav01、HTC_S59_wav02

【ホストスピーカー】フーバー立石

【ゲストスピーカー】宮田テル、近藤トクゾー、ビクター佐藤、デービッド・グリフィス、
フランク馬場

【言語】日本語

【放送日】1960年11月14日、1960年10月31日、1960年11月13日、1961年12月5
日

HTC_S59_wav01 【開始】00:00:00 【終了】00:23:41

HTC_S59_wav02 【開始】00:00:00 【終了】00:30:20

HTC_S59_wav01 【00:00～15:30】 宮田テル・近藤トクゾー、1960年11月14日

深川・ワカフクにて。NHK アナウンサー宮田輝へのインタビュー。聞き手はフーバー立石。宮田と立石はハワイにて行われたのど自慢で会って以来。NHK のど自慢で三味線の伴奏を受け持っているカタノサダコも同席している。

カタノいわく、深川には不動堂があり、28日にお参りするのがいいとされている。東京の人は信仰深い人が多い。毎月お参りする人もいるし、また、年末には初詣に行くことが習慣となっている。深川はまた、美人が集まった場所であると言われている。

ハワイののど自慢は非常に好評であった。とても歌がうまく、声がいいと評判である。今後もハワイと日本を行ったり来たりしたいと宮田は考えている。

HTC_S59_wav01 【15:50～23:41】ビクター佐藤、1960年10月31日

第一ホテルにて、ビクター芸能株式会社企画課長佐藤クニオへのインタビュー。聞き手はフーバー立石。佐藤はハワイタイムスで記事を書いている。佐藤が初めてハワイに行つたのは、1958年の夏であった。三浦洸一と神楽坂浮子と一緒にハワイの島々を回った。三浦は、北海道でホテルを営む西村トシオの三女、西村節子、二十歳と婚約をし、三日前に発表がされた。ハネムーンにはハワイに行く予定だとのことである。

日本人の娯楽の幅が広がったと佐藤は考えている。山に行ったり、ゴルフに行ったり、最近では音楽喫茶というものがはやったりしている。歌声喫茶という場所では、入店した人々が一緒に歌を歌うことができる。築地のうなぎ屋ミヤガワには KOHO 放送局のタナベやアラカキを連れていったので、これから立石も連れていく予定である。

HTC_S59_wav02 【00:00～15:57】デービッド・グリフィス、1960年11月13日

ニューヨーク出身のグリフィスは立石のハワイ大学の同級生である。1957年にハワイから日本へ移住した。青山学院大学で英作文と現代英文学を教える専任講師をしている。グリフィスの妻は慶應大学でフランス文学を学んだ。2人は、妻の叔母の紹介で出会った。その叔母は台湾製糖の関係で、長らく海外生活をしていた人であるという。

グリフィスはホノルルにいた頃から日本の仏教に興味があった。日本でも大学に入りたかったが、日本語力が足りず入学できなかった。来年は早稲田大学に入りたいと考えている。ホノルルの日蓮宗と日本の日蓮宗には違いがあるとグリフィスは思う。ホノルルの日蓮宗は仏教を勉強するが、東京の日蓮宗は迷信が多いという。

HTC_S59_wav02【15:59～30:20】フランク馬場、1961年12月5日

フランク馬場に対する、KIKI放送局スタジオでのインタビュー。聞き手は男性（マツモト？）。馬場はこれまでVoice of Americaに勤め、その後アメリカ大使館に勤めている。2年前にハワイが50番目の州になった際、Voice of Americaからハワイへ派遣された。馬場はオークランド出身で、カリフォルニア大学を卒業した。第二次世界大戦期は、VOAの前身である戦時情報局（Office of War Information）に所属し、終戦直後は日本に派遣された。戦略爆撃を調査する一団(US Strategic Bombing Survey)に入り、60日間の滞在の予定であったが、日本語でラジオができる人と重宝がられ、実際は6年日本に滞在することとなった。その後、VOAが日本語放送を再開するというので、アメリカに戻り、ニューヨークやワシントンなどに滞在した。アメリカ大使館の文化交換局に仕事を移す予定となっている。

VOAはアメリカの情勢・秩序を他国に知らせるものである。鉄のカーテンの向こう側、共産主義諸国への自由主義陣営の宣伝のために始められた。日本語だけでなく、ラテンアメリカなどスペイン語圏やアフリカ諸国にむけた放送も力を入れている。

S60 土屋セイジ

【ファイル名】HTC_S60_wav01、HTC_S60_wav02

【ホストスピーカー】ナリタ、フーバー立石

【ゲストスピーカー】土屋セイジ

【言語】日本語

【放送日】不明

HTC_S60_wav01 【開始】00:00:04 【終了】00:05:32

HTC_S60_wav02 【開始】00:00:00 【終了】00:10:13

HTC_S60_wav01 【00:04～05:32】「今朝の家庭訪問」土屋セイジ

商業時報社長土屋セイジに電話でインタビューをする。聞き手はナリタ。土屋はこの仕事を始めて13年になる。仕事のコツはなく、貧乏もやった。土屋は横浜関内の生まれ。横浜の人たちが集まる「浜っ子会」をやっている。日本には二度ほど帰った。横浜は戦災で変わったので興味を持たなくなった。ハワイで暮らすのがよく、日本に帰りたいと思わない。ただしワifを連れていきたい。家庭中心の朗らかな生活をしている。本を書きたいと思うが時間がない。

HTC_S60_wav02 【00:00～10:13】

アメリカ人の日本認識について話す番組。聞き手はフーバー立石。ケネディ大統領がハーバード（大学）の日本研究者のライシャワー博士（Edwin Oldfather Reischauer）を日本に送った。『US and Japan（正しくは The United States and Japan）』という本には、ライシャワーが日本人の道徳観念には恥というものがあつても罪（sin, guilty）意識はないと書いている。これはアメリカ人の観察と言うよりは、キリスト教から見た日本社会の観察である。キリスト教で言う罪は犯罪とは違う。人が見ていようと見ていまいと、神が聖書で定めた掟に反することをした場合、または、掟と定められたことをしなかつた場合、神とその人の間の問題、罪（guilt）を構成する。日本人の場合、人が見ていなければ多少のことは大目に見てよいという感覚がある。キリスト教では、桜の枝を折ってはいけないということが、人間と神との関係で考えられている。日本人の場合は、見ていなければやってしまい、見つかると恥ずかしい。キリスト教の罪意識とは全く違う。犯罪をして警察に引っ張られたらみっともないと考えるが、罪の意識とは関係ない。

日本には様々な宗教があるなかで、日本を代表する宗教は何か。仏教と神道が、アメリカ人やヨーロッパ人が言うところのレリジョン（宗教）であるかどうかについては問題がある。キリスト教としてのレリジョン（宗教）とは違い、日本では信仰については無関心であるこ

とが多い。無関心は日本人の問題である。

宗教と美術について。最近仏像やキリスト教教会建築を見ると、すっきりとした線が出ている。教会はモダンな新しい形になっている。教会の形は信仰の表現である。ゴシックのノートルダムはそのときの神学を代表している。最近建てられるモダンな教会は、近代人のものの受け取り方を表現している。流行ではなく神学的な意味がある。

最近の牧師はサラリーマン的な態度が見て取れる。少数は熱心に社会的な問題のために働いている。

S61 US Ambassador to Japan introduced by

Governor Ariyoshi

【ファイル名】HTC_S61_wav01

【ホストスピーカー】N/A

【ゲストスピーカー】ジェームズ・ホッジソン

【言語】英語

【録音日】1975年?

【開始】00:00:00

【終了】00:24:51

駐日アメリカ大使による演説の録音。話の内容から、話者がジェームズ・ホッジソン (James Hodgson) と分かる。

ジョージ・アリヨシは眞の意味で日本の需要、利益を理解し、アメリカの需要、利益を日本に伝える親善大使である。アリヨシは今年の日本訪問で親善を成し遂げた。コウノやサカタとともに、日本社会や経済に対し、アメリカのよい印象を植え付けた。

多文化、多言語を生きるようになり、社会によってしきたりも様々ななかで話をすることが難しい。アメリカ人はジョークを用いて演説を始め、場を盛り上げることを好む。日本ではそうではなく、伝統的に謝罪から演説に入ることがおおい。日本で初めて講演した際、どのように話し始めるべきか迷った。ジョークの国アメリカと、謝罪の国日本を取り入れて、「ジョークを準備しておらず申し訳ない」と言って話し始めた。異文化間のコミュニケーションとはこのようなものである。

際立った演説では、演者はしばしば演説の重要な部分を納得して聞いてもらえるように正当化して話をする。今日はそのようにはしないが、ハワイにおける日系アメリカ人の重要性について、天皇の訪米について後ほど話をする。ハワイは太平洋の中心に位置しアメリカと日本の間にある。今日日米関係が良好であるのは、ハワイのおかげである。

過去 20 年を振り返ると、アメリカと日本の関係は外交上困難なものであった。最近ではアメリカの東アジア政策が日本の政治的・軍事的安定にも寄与するようになっている。日米では貿易規模が拡大し、文化交流が盛んだが、日本と中国はうまくいっていない。

日米両国の関係は成長し、強固になっている。昨年 11 月の大統領の来日もその一つである。補佐官や議員も国を渡っている。太平洋を渡るのは、一方向ではない。日本の高官のワシントン訪問もある。8 月の首相の訪米も成功裏に終わった。天皇御夫妻の訪問も、アメリカに歓迎されている。

ある国々では過去の意見の相違を引きずって未来の関係に悪い影響を及ぼしている。反対に、アメリカと日本の関係改善は成功した。未来に起こりうる日米問題とは何であろうか。問題は起こるだろうが、予測すれば避けることができる。アメリカと日本は、共通の需要、利益、目的を持っている。伝統、文化、言語の面で相違はあるが、相違を互いの不理解にしてはいけない。経済的脆弱性、外的脅威、天然資源の限界などの問題が日本にはあるが、アメリカはそのような状況でリーダーシップを執る責任がある。日本の首相や天皇の訪米は、アメリカの大衆に日本の友情、信頼を強く印象付けるだろう。アメリカにおいて日本に対する印象は今日非常にポジティブである。逆もまた然りである。

日本人は誰よりも自分たちを信じ、伝統、文化、組織を重んじる。日本の憲法で、天皇は日本国民統合の象徴であると定められている。ここハワイでも天皇の来訪は大きな意味を持つだろう。天皇はアメリカのどこでも歓迎されるだろう。天皇訪問によって、日本はアメリカにとっての友人、パートナー、同盟国として扱われるべきだと考えられるようになるだろう。

人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究
日本関連在外書料調査研究
「ハワイにおける日系社会資料に関する資料調査と社会調査の融合的研究」

フーバー・タテイシコレクション（ハワイ日本文化センター所蔵）

資料集

2024（令和6）年3月29日 発行

編者：朝日祥之

著者：松平けあき 宮崎早季

発行：大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

電話：042(540)4300 (代表)